

自治研 かながわ

89/12
90/2
合併号

No.22(通算86号) 市民が主役のネットワーキング



社団法人 神奈川県地方自治研究センター



もくじ * * * CONTENTS

かながわ情報ネットワーク・フォーラム 「市民が主役」のネットワークング……………	1
あいさつ 横浜国立大学講師 緒形 昭義 司会 県自治研センター 佐藤 孝治	
問題提起1 「現代社会における ネットワークングの役割」……………	3
ネットワークング研究所 ジェシカ・リップナック	
問題提起2 「ネットワークング理論とは何か」……………	8
ネットワークング研究所 ジェフリー・スタンプス	
質疑応答1……………	12
問題提起3 「逗子のまちづくりと 市民の情報主権の確立」……………	14
逗子市長 富野 揮一郎	
問題提起に対するコメント……………	20
質疑応答2……………	22
事務局総括座談会「ネットワークングに関する 問題提起をどうとらえたか」……………	29
緒形 昭義 (建築家、横浜国大講師) 川崎 綾 (まちづくり情報センターかながわ) 佐藤 孝治 ((社)神奈川県地方自治研究センター) 鈴木 健一 (日本ネットワークワーカーズ会議事務局) 土屋真美子 (まちづくり情報センターかながわ)	
資料「ネットワークング社会への道程図」……………	33

「市民が主役」のネットワークング

— まちづくりと市民の情報主権を考える —

はじめに

横浜国大講師 緒形昭義

今日はリップナック、スタンプスさんの御兩人を中心にして、ネットワークングの問題に関して議論したいと考えています。

「ネットワーク」という言葉は、近ごろ日本でもよく使われるようになりました。ただ、どうも日本で使われる場合、ネットワークングというのは単に線を結ぶとか、だれかと一緒に歩くというように考えられているようですが、「ネット」というのは実は網目のことです。これは幾何学のグラフ理論ではないわけですが、「網目」とちょうど反対側の構造的な形というのは、ツリーといいますか、ピラミッドのことです。

どちらかといいますと、現在の社会というのは、ピラミッド型の社会といえるかと思います。例えば、価値観についていいますと、やはり日本の国はピラミッドの体系ができています。例えば、今年の初めに昭和天皇がお亡くなりになりましたが、その時の報道を見ても、やはり国

を頂点とした価値観のピラミッドが非常に厳格できている社会です。

ただし、こういうピラミッドでは頂点が国にあるわけですから、国の基準を外れるというようにはなかなかいきません。したがって国と国との関係、国際的な関係ではこのような国を単位にしたピラミッドというものはいろいろな矛盾を起こします。その矛盾というものは貿易摩擦であったり、文化摩擦であったり、今の新聞をにぎわしている状況はそういう状況です。

それから、国のレベルでのピラミッドも、必ずしも単一ではありません。例えば、原子力発電所を造ろうという時には、エネルギーの点では何らかの形で手を打たなければいけないという問題と、原子力発電所から出てくる廃棄物の最終的な処理をどうするか、あるいは発電所の環境に及ぼす安全性はどうかという問題に関しては、必ずしも一致していません。ですから、通産省のピラミッドと環境庁のピラミッドというのは違ってきます。

これは池子の問題に関しても同じです。国をどう守るかということと、国土の緑を保全するという立場というのが国のピラミッドとしても、本当はあるはずですが、これについては片一方

のことだけがいわれています。

これに対して市民の側は、そういう国の建て前のピラミッドではとても今の環境は守っていないということ、いろいろなピラミッドを横につなげていく、いわば網目の構造を作り始めている。

私たちの考え方を実証してみても、実は私たちの考える概念というものは、ピラミッド型です。つまりツリー型になりやすい。私たちの知識というのはやはり専門の文化に分かれていてそれぞれの概念を作るところですから、私たちの作る言葉自身も、どちらかという社会の持っているツリーの構造、ピラミッドの構造に規制されることになります。

実は市民が横につながる、新しい問題を提起していく網目の構造というのは、今までであるようなツリー概念ではない、新しい概念であることも要求されています。

今回お呼びしたお二人は、「ネットワーキング」という本をお書きになって、新しい概念を提起しています。今の私たちの社会というのは言葉が相当早目に風化していく時代です。「ネットワーク」というとNTTも使うし、どこかの自動車会社も使うという話になってしまって、実はネットワークとは何かということがよくわからない社会になっています。

実は、今の社会は多消費社会というか、意識的にどんどん言葉まで廃棄物にしていく社会だと思いますが、しかし、ここで改めてネットワークとは何か、ネットワークが今の社会の構造に対してどういう意味を持つかということも含めて今日はディスカッションができるだろうと思います。

司 会 県自治研センター 佐藤孝治

緒形先生のお話にもありましたように、「ネットワーキング」という言葉が日本の社会に入ってきたのは、この本の翻訳が出版された84年頃だと思いますが、現在ではいろいろな形で使われています。つまり、ここに集まっているような市民運動をやられている方がたによって使われているとともに、企業のレベルでは、ネットワーキングという概念を自分たちの経営活動を効率化するなどの目的で使われています。

実は先週、川崎市溝の口に「神奈川サイエンスパーク」がオープンして、オープニングの国際シンポジウムがありましたが、そこでもキーワードとして「ネットワーキング」ということがいわれていました。ビジネス活動を考える上で今後、1990年代に大きな意味を持つものだということがいわれていました。

そのような意味で、いわば企業社会の側もこの概念を取り入れて動き始めているということになるわけです。御案内のチラシにも書いていますように、リップナック、スタンプスさんが「もう1つのアメリカ」ということを提唱しているのと同じように、日本の社会においても経済効率性を追求する部分だけではない、もう1つの日本というものを考えている市民運動、住民運動というものがあるということ、この交流を通じて明らかにしていくことが、この会議の重要な目的だろうと思います。

その意味で、一方的に講師のリップナック、スタンプスさん、あるいは富野逗子市長からお話をさせていただくだけでなく、会場の皆さんも含めてお互いに意見交換をすることを重視したいと思います。

現代社会におけるネットワーキングの役割

ネットワーキング研究所 ジェシカ・リップナック

1. ネットワーキングを始めた背景

どうもありがとうございます。

多様な分野の人が集まっている場所に来られたというのは、非常にスリルのあることだと思います。そして、その全部の方々に我々アメリカの友人になっていただいて、いろいろなことを教えていただきたいと思っています。

と申しますのは、実はネットワーキングということに関しては、日本の方がアメリカよりはるかに進んでいる面があるような気がするわけです。非常に多様な分野でネットワーキングが行われ、それぞれの多様な価値観を持った人たちがさまざまな形で活動しているという意味で、我々にとっても大変勉強になると思っています。

今回は原稿を読み上げるというよりも、かなり自由な形でお話させていただきたいと思っています。

この中の何人かは私がボストンにいる時から存じ上げている方です。例えば、会津泉さんや鈴木健一さんなどはボストンを訪れていただいたことがあります。

それから池子の問題に関しては、既に7年に

もわたり、我々のニュースレターを通じてアメリカに紹介してきましたし、また本日は富野市長とお会いすることもできて大変に光栄に思っております。

それではまず若干の背景説明としまして、どのような形でネットワーキングを私たちが始めたのかということをお話させていただき、続いてネットワーキングを実際に適用した最も典型的な事例として、この春に起こったある1つの出来事に関するネットワーキングの過程をちょっと振り返ってみたいと思います。

それから、もう少し具体的にネットワーキング、特に草の根の活動がどのような形で行われているのか、その背後にあるネットワーキングの理論といったものはどういうものなのかということを紹介したいと思います。

今申し上げた草の根のネットワーキングの状況に関する最新のファイルを持っていますので、興味のある方は見ていただきたいと思います。

それでは、これから、どのような形でネットワーキングを始めたのか、関わり始めたのかということについてお話ししたいと思います。

今年は私どもがネットワーキングを初めてから丁度10年目になります。実は、79年10月に、たった1通の手紙をロバート・スミス三世とい



う人に出したことからそれは始まったのです。

ロバート・スミスさんは、永年にわたってNASAに勤務された方で、ネットワーキングに関する本を書きたいのだけれども、だれに書いたらいいだろうという手紙を79年10月に出したのです。

そして、9名の人を紹介していただき、それらの人に手紙を出して、6名の人から返事がありました。その6名からまた人を紹介してもらい、最終的にコンタクト先が5万名ほどになったわけです。

それで、これらの人々に手紙を出して、4000名ぐらいから返事が返ってきました。この4000名の人にまた手紙を出して、1600名の人から返事もらったわけです。

このようにネットワーキングに関する研究を始めるということが、ネットワーキングを始めていく一番の手がかりだったわけですが、これらの人々に出した手紙の文面というのは極めて簡単で、「あなたはネットワークの一部ですか」あるいは「あなたはネットワークの一部として機能していますか」といった質問項目だったわけです。郵便配達の方もしまいにあきれられるぐらいにたくさん手紙を出しました。

その結果を基にして、82年にアメリカで「ネットワーキング」という本を出しました。同時

に、その年の「ワールド・フューチャー・ソサエティ」で講演を行いました。その講演の最中に増田米二さんという日本人が突然飛び出して、日本におけるネットワーキングはこうなっていると、日本の状況をいろいろ説明してくれました。

その上、増田さんは英語版の「ネットワーキング」のテキストを日本に持ち帰り、経済企画庁の援助もあって、日本語版が出版されることになったわけです。そういった点で、増田さんには大変に感謝しています。

そういうことを手初めにネットワーキングを始め、現在では70ヶ国とネットワーキングを行っています。

2. 天安門事件報道と 技術革新の果たした役割

ここで1つの例を取り上げて、ネットワーキングがどういうものであるのか、そしてそれがどのような手段になるのか、とりわけ21世紀に向かってさまざまな技術の進歩が今後も見られると思いますが、技術の進歩がどのようにネットワーキングに貢献できるのかということをお話したいと思います。

私が取り上げたいテーマを申し上げますと、「グローバル・ピープル・ネットワーク」ということになります。これは1つのキャッチフレーズのようなもので、バッジとかTシャツなどにそのフレーズを書いて配ったりしています。

私が今お話したいのは、いかに草の根の活動がヒエラルキー的な組織に対抗したか、そしてその中にどれだけの人に関わり、かつまた現在における技術の進歩を通じてどのような活動が

具体的に行われたのかということですが、これは実は悲劇的な話であるとともに、現在進行形の話でもあります。

それでは、数か月前にさかのぼって、北京の春の話をしましょう。

中国で指導者の1人が亡くなり、その後ソ連民主化のリーダーの1人であるゴルバチョフ書記長が北京に降り立ちました。百万人規模の学生、労働者たちが天安門広場を占拠し、そして自発的に自分たち自身を組織化しました。

増田さんとは今年7月に、やはり同じくワールド・フューチャー・ソサイエティの会議の席上でお会いしましたが、彼がいみじくもいったことは、数百万の学生、労働者たちはだれも命令されてそこに来たのではなく、彼らは自分たち自身でネットワーキングをしていたのだということでした。

ネットワーキングによって集まった学生たちや労働者たちは、自発的に3つのグループに分かれました。1番目は中国政府と交渉するグループ、2番目はハンガーストライキを行うグループ、3番目は後方支援活動のために天安門広場に残り、テントを建てたり、あるいは食料の確保といった活動を行うグループだったわけです。

当然そこでは、さまざまな形のコミュニケーションが爆発的に活発になりました。お互いの機関紙、ニュースレター、壁紙、コンピュータ、コピー機、ビデオ、コードレス電話、それから一番現在世界に広がっているコミュニケーション手段であるファックスなどが使われました。

そして中国国内の大学、さまざまな企業や政府関係の省庁などが、それらの学生たちにコミュニケーションのためにファックスを使うことを許しました。それから、外資系企業もコンピュータ・ネットワークを通じて、彼らのメッセ

ージを国外に送ることを許したわけです。

そして、国際電話が飛躍的に増大しました。国外にいる学生たちが自分たちの家族、両親、あるいはクラスメート、中国に残っている人たちに電話をかけたわけです。また、海外留学している中国の学生たちが、運動を支援するためのグループを作りました。実際、日本にはこの時期、大体1万人の正規の中国人留學生がいましたし、また、アメリカにも大体4万人の中国人留學生がいました。

カリフォルニアでは大学院生がファックス通信を始めましたし、また他の者はコンピュータを通じて電子メールを始めました。これは大変画期的な出来事だったと思います。いわば世界中が天安門事件について、実況中継でその状況を見ることができたということです。

ゴルバチョフの中国訪問を機会にたくさんの報道陣が中国に来ていましたけれども、ゴルバチョフを追いかけるよりも、むしろ天安門事件の報道に通信衛星その他のメディアを使ったわけです。しかもそれはライブで世界中に放送されました。恐らくこれは人類の歴史において、最大規模の政治的なデモンストレーションでもあったといってよいでしょうし、またハイテクが一番駆使された出来事でもあったと思います。



技術が発展したことによって、さまざまなレベルでネットワーキングを増幅することがいかに可能となったか、またそれ自身がいかにフィードバックするシステムになっているのかということなどを次に話したいと思います。

政府と交渉する中心的なリーダーでもある北京大学の生物学専攻のある学生が天安門広場で演説をしていた時に、カナダのテレビ局クルーが彼の演説をライブで中継しました。そしてモントリオールでは同テレビ局のプロデューサーがビデオシグナルを調整して、学生の肖像をスチール写真にしました。

そして、でき上がったスチール写真をまた北京大学にファックスで戻したわけです。北京大学の学生はそれをコピーして壁紙に張り出しました。これを再び現地にいるテレビ局クルーがそのまま中継して、海外にいる中国人学生と天安門にいる学生たちがどのような形でコミュニケーションしているのかということ、具体的な例で紹介したわけです。この1枚の写真が象徴的に出来事の経過を表していました。

他方、ボストン近郊のニュートンにある宗教関係のセンターがハーバード大学やMITなどの中国人学生たちがファックスや電話を使えるような措置を施しました。

このような中国人留学生の活動をニューヨークタイムスが報道した後、次から次へと他のマスメディアがそのセンターにおける活動を報道しました。そのうちの1人が「ボイス・オブ・アメリカ」の記者で、彼はそのセンターの電話番号を中国向けに放送しました。「ボイス・オブ・アメリカ」放送を天安門広場の学生たちは聞いた後、同センターの番号をメモして、お互いにその番号を回しました。そして実況中継として、中国で現在どのような事態が進行してい

るのかということ、ニュートンのセンターに電話で知らせ始めたわけです。

一方、私たち自身もこうした中国における状況に自ら関わることになったわけです。カリフォルニアのマーキュリー・ニュースのジラ・ウィラード記者がワールド・フューチャーズ・ソサエティに出席していた私に、技術の発展と中国における民主化の動きとの関係について、何かコメントできる人がいないかということ、電話で聞いてきた。

また、他の通信社、マスメディアが我々のところにインタビューに来ました。例えば、共同通信がそうですし、ロスアンゼルス、ロンドン、トロントなどから同じような問い合わせが次々に入ってきました。そんなことをしているうちに6月4日の天安門事件になったわけです。

そこで起こった状況は、現場にいた記者たちが携帯電話などを通じて北京から海外に報道したわけです。そうした中で世界中がその事態をいわばライブで、ボストンでも東京でも同時に目撃することになったわけです。その短い期間、ネットワーキングの窓が世界中に開かれたとっていいでしょう。

3. 天安門事件後の アメリカ国内での動き

ボストンのセンターには、天安門で起こっている状況が、コレクトコールの電話でどんどん入ってきました。

そこで起こった中国側とのやりとりは、大変興味深いものであったが、我々と中国との間にはわずか3つの電話しか連絡のためになかった。そのうちの2つは本当に小さなコーヒESHョッ

プのテーブルのような場所に置いてあり、それからもう1つのファックスは全然違ったビルにありましたから、我々は新しい情報が入るたびに何百メートルも行ったり来たりするというような大騒ぎだったわけです。

アメリカの一般市民に、どう自分たちのネットワークを通じて状況を伝えるのかということで、ネットワーキングの方法が使われました。

具体的には、我々の会う人ごとにその状況を伝え、自分たちが知っているさまざまな企業だとか、民間の関係先に伝えました。我々が何かをしてほしいといったことを、ほとんどすべての人がコミュニケーションした際に、「イエス」といってくれ、ある人は積極的に電話をかけてくれたりしました。

そうした形でアメリカ国内の市民のネットワークに訴えかけて、1週間もしないうちに、ボストンを中心とする学生たちで組織した「チャーリー・インフォメーション・センター」に大変な額の寄付金などが送られてくるようになった。その中には、ファックスとか、コンピュータなどのさまざまな器材も含まれていました。もちろんコミュニケーションのプロたちもさまざまな技術援助を提供してくれました。

6月末になり、そうした形でのネットワーキングが頂点に達したころ、先ほど申し上げた生

物学専攻の北京大学学生が、センターに電話をかけてきました。恐らくそのことについては皆さんも多分テレビなどを通じて御存じだと思いますが、彼は中国を脱出してボストンから電話をかけてきたのです。彼はリーダーとして中国政府と交渉していた学生の中で、中国を脱出してアメリカに来た最初の人だったわけです。

彼は直ちに記者会見を行いたいということだったので、わずか2日以内に50人のジャーナリストたちが、センターの記者会見場に集まってきました。記者会見の場で、どうやってここまで辿り着いたのかという質問に対して、彼はセンターの電話番号を繰り返すだけでした。

現在では中国の状況は、より見えにくくなり、またマスコミの関心も東欧の方に移ってしまっています。そうした状況がありながらも、ネットワーキングというのは今後も当然のことながら継続的なプロセスとして、ずっと続けられていくべきであると思います。

この出来事は1つの事例に過ぎませんが、この事例を通してネットワーキングに関する原則のようなものも引き出すことが可能ではないかと思っています。それが草の根のさまざまな活動にどのような一般的な意味を持っているのかということについて、スタンプスさんの方からお話したいと思います。

ジェシカ・P・リップナック氏

ネットワーキング研究所の代表であるリップナック夫人はジャーナリストであり、16歳のときにレポーターとして仕事をはじめ、以来、多くの出版物に寄稿している。70年にアンティオック大学で哲学の文学士号を受けた。彼女はエレクトロニック・ネットワーキング協会の創設メンバーであり、いろいろなソフトウェアを用いて数多くのオンラインのコンピュータ会議を手がけてきた。

ジェフリー・S・スタンプス氏

ネットワーキング研究所の研究部長であるスタンプス博士は、システム理論家であり、「ホロノミー：人間システム理論」（インターシステムズ、1980年）の著者。1980年に、彼はセイブルック研究所から人間システムの哲学博士号を取得した。彼はまた、ジェネラル・システムズ・リサーチ協会の積極的なメンバーであり、アメリカ科学振興協会の評議員のひとりでもある。

ネットワーク理論とは何か

ネットワーク研究所 ジェフリー・スタンプス

1. ネットワーク理論とは何か

日本にはさまざまな形でのネットワークに関する具体的な活動があると思いますが、ここではネットワーク理論といったものを取り上げて少しお話した後、皆さんの方からいろいろな質問を受ける形で、アメリカではどうなっているかということの説明したいと思います。

日本語訳された本の中では、ネットワークに関する10のモデルを取り上げていたと思います。その具体的な内容については、本を見ていただくことにして、それらの10のポイントをもう少し平易に、目に見えるような形で説明したいと思います。

これから説明するモデルは、3つの要素から成り立っています。1番目が「ノーズ」(結び目)、2番目が「リンク」(結びつき)、3番目が「パーパス」(目的)というものです(図-1参照)。これはさまざまなネットワークが持っている多くの要素をいわば抽象化した形で描いたものです。

まず、結び目というのは活動の中心であり、その具体的な中身は個人、あるいは大きな組織

の中の小さな1つのグループですから、個人に対してのグループと考えることができます。

ネットワークというのは、単に人であるとかグループを指すではありません。そうした人やグループの間をつなぐ結びつき、人間の社会でいいますと、いわゆる人間関係といったリンクの部分も見逃せないわけです。

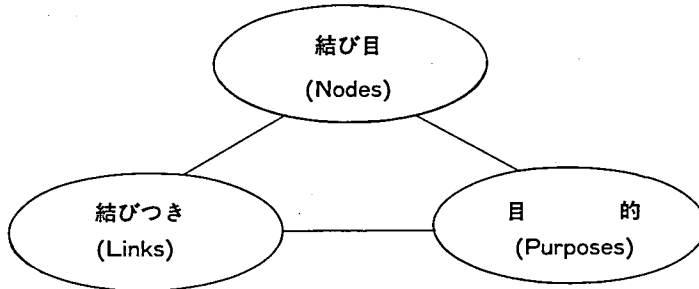
当然のことながらこのリンクは、人間社会における人間関係といったものを考えた場合、目に見えるものではありません。友情や愛情、あるいは命令、指揮といったものは当然目に見えないものです。

この関係には、その前にインターアクション(相互作用)とコミュニケーション(伝達)というものがあって、コミュニケーションのレベルではこれは目に見える具体的なものです。お互いの顔と顔との関係、あるいはお互いに電話をかけ合う関係、あるいはどこかからどこかへ移動する関係が、いわゆるインターアクション(相互作用)といわれるもので、そしてもう少し継続した関係性、リレーションシップがでくるわけです。

ですから、こうやって見ますと、コミュニケーションという要素はネットワークにおいて非常に重要な位置を占めているものです。しかし、そのコミュニケーションだけがネットワークを

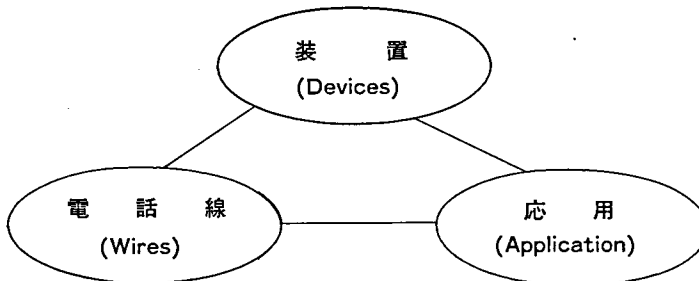
ネットワークの概念図

図-1 基本的なネットワークモデル



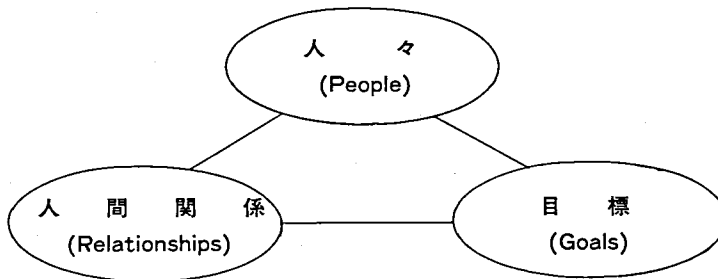
ネットワークは目的のために結びつけられた知的な結び目によって構成される。

図-2 技術的なネットワーク



技術的なネットワークは人々のネットワークを支援するものでなければならない。

図-3 人間のネットワーク



ネットワークにおける結び目として人間やグループを考える。

形成するわけではなくて、リレーションシップ（関係性）というものがネットワークの非常に重要な要素の1つとしてあるわけです。

今「ノーズ」（結び目）と「リンク」（結びつき）ということについて話しましたが、この2つだけではネットワークは十分なものにはなりません。さらにもう1つ重要なものとして、お互いに共有化された目的といったものが必要となるわけです。

ネットワークというものは限定され、はっきりと定義づけられた政策や規則であるとか、あるいは力関係によって規定されてくるものではありません。すなわち、ヒエラルキーに基づいた、あるいは官僚制的な上下関係に基づいた関係性が機能するわけではないので、ネットワークが統一的な1つの機能として働くためには、かつお互いを結びつけるためには、お互いに共有化された価値観や目的といったものが必要になるわけです。

今申し上げた部分をもう少し具体的に人間に当てはめてみますと、これらの3つの要素は、それぞれ具体的な人間と、人間の間関係性、それからその関係性に基づいて作り上げられる1つの共有化された目的といった3つの部分になります。

ネットワークには2つのタイプがあり、その1つは情報あるいはテクノロジーのネットワークであり、それから一方に人間を中心とするネットワークがあると思います。

ネットワークには、こうした技術進歩とか科学技術に基づいた物理的なハードの部分のネットワークと、それから人間の間目に見えない関係性に基づくネットワークの2つがありますが、今まで申し上げたモデルを通じて、人間関係のネットワークとテクノロジーのネットワークとがそれぞれ共通の要素を持っているこ

とに気づかれると思います。

最初のテクノロジーのネットワークにおけるノーズ（結び目）というものは、科学技術がもたらした電話、コンピュータ、テレビ、ファックスなどのさまざまな便利な機器に該当します。そしてテクノロジー・ネットワークにおける結びつきというのは、極めて物理的なもので、通信ケーブル、マイクロウェーブといった1つ1つの機器を結びつける物理的なものがリンクに当たります。

テクノロジー・ネットワークの3番目の要素というのは、往々にして見過ごされがちなわけですが、それこそがキーといえるものがあるわけです。それは、テクノロジーをどのようにして適用するのかとか、電話であれば会話の内容自体といったものです。

コンピュータ機器などのテクノロジー・ネットワークに関わるさまざまな器材を売る側にとって、まさに器材そのものの販売に関心があるわけですが、それを使う人にとっては、ハードの器材のみならず、それをどのように使うのか、何の目的で使うのかということが重要であり、そのことなくしてはそのユーザーにとってはネットワーク自体が機能しないわけです。



2. テクノロジー・ネットワークと人間のネットワーク

このようなとらえ方をしてみますと、いわゆるテクノロジーのネットワークと人間のネットワークといったものは共通の言語、共通性を持っていることがわかると思います。

テクノロジー・ネットワークを人間のネットワークに貢献するものであるという関係性の中でとらえることができます。人間がテクノロジー・ネットワークに自らを合わせるのではなく、むしろ逆にテクノロジー・ネットワークを人間のネットワークに合わせるようにデザインすることが可能であるということがわかると思います。

次にテクノロジーのネットワークと人間のネットワークの持つ構造について、若干説明したいと思います (図-2、図-3 参照)。これらのモデルにより、その構造を理解すると同時に、我々がネットワークをどのように始めて、それを維持することができるのかということがわかると思います。

それは具体的には3つの段階から成り立っていると思いますが、第一は、目的を明確にするということです。これは、そのネットワークにおいて一番重要な要素であり、人々がどのように参加して、共通のビジョンや目的に向かっていくのかということを明確にすることです。

第二は、この結び目の部分に、具体的にどういふ人たちが、あるいはグループがいるのかということ、はつきりと理解することです。どういふ人たちが実際にそのネットワークにいるのか、どういふグループがあるのかということ、を明確にする必要があります。

第三は、この結び目同士を結びつけるという作業です。目的を機能させるためには、そのことをはつきりと理解した人々やグループを結びつけるということが必要になります。

そして人々やグループによって成り立つ結び目同士を結びつける作業というのは、あらゆる可能な手段を通じて行う必要があります。印刷物、電話、あるいはコンピュータ、あるいはお互いに面と向かって話すことなどのさまざまな可能な手段を使って、その結びつきを作ることが必要です。

これをもう一度繰り返しますと、これらの3つのステップというのは、1番目は目的を明確にすること、2番目はそれぞれの結びつきがどういふものであるかをはつきり認識すること、3番目にその結びつき同士を結びつける作業として整理することができます。

少なからず重要な点は、3つのステップを何度も繰り返すということです。すなわち目的、結びつきを明確にして、その間を結びつける作業を行った後、もう一度その目的を明確にするというステップに立ち戻り、そしてこれまでの行動や、これまでの経緯、変化などを通じてもう一度その目的自体を再評価することが必要になります。

これらの3つのステップを丁度円を描くように繰り返すということは、いってみれば螺旋状に上昇していくような過程であり、そのような作業を1回ずつ行うことによってさらにそのネットワーク自体の理解が高まり、またその効率性も高まっていきます。

ここまでをいってみれば、議論の前半部分といたしましょう。ここで一度我々の側の問題提起を終わりにして、その後の議論については皆様から質問を受ける形で続けたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

質 疑 応 答 1

司 会 どうもありがとうございました。

次に、今スタンプスさんがお話ししましたように、やはりネットワーキングということを考える場合、お互いの意見交換ということが非常に重要ですので、ここで10分ほど時間をとりまして皆さんからの疑問あるいは意見を出していただいて、それにお二人からお答えをしていただくという時間をとりたいと思います。

質 問 ただいま伺いましたお話は、企業の側といたしますか、資本の側でお金をもうけていく手段としても非常に有効なものではないかと感じます。

ここに集まっている方はどちらかというと草の根の運動を行っている方が多いわけですが、企業の論理と草の根運動の論理のどこに差がでるのかという点を伺いたいと思います。

また、ネットワーキングが何に対して大切なものであるのかということをお聞きしたいと思います。

スタンプス いわゆるビジネスにおけるネットワーキングは、市民たちが作り出すネットワーキングとは異なっていて、まず目的が既にはっきりしていると思います。すなわち利潤を上げることが目的です。市民が作り出すネットワーキングは、目的は当初からそうはっきりしているわけではなく、市民の積極的な参加によって、その目的が明確にされていくものであると思います。

それから市民のネットワーキングにおいては、関係性が非常に水平といたしますか、横の関係が維持されているのに対して、ビジネスが作りだ

すネットワーキングでは、「ネットワーク」という言葉を使いながらも、往々にしてトップダウン、上下関係に支えられていることが多いという違いがあるわけです。

私は、ビジネスがネットワーキングを本当の意味で育て上げていくことができるとしたら、それは驚くべきことだと思っています。1つの例を挙げて考えてみたいと思います。

登小平さんが企業の取締役社長だと考えてみましょう。取締役社長となった登小平氏はその企業において、ネットワーキングをするためのテクノロジーであるさまざまな情報機器をとりつけ、海外と自由なコミュニケーションが可能になるようにしたとしましょう。

彼がそのような措置をとることは、はからずも人々が積極的にコミュニケーションに参加し、あるいは自らの意思決定をしたいと望むことを促進することにもなります。

ですから、一方でコミュニケーションに関して非常に対外関係を開放し、一方で組織内におけるヒエラルキー的な上下関係をそのままにした場合には、当然摩擦が起こって崩壊の危機に直面する可能性が高くなるでしょう。天安門事件はそのことを示唆していると思います。

同じようにビジネスの中においてコミュニケーションを開放して、そのビジネスにおける人間関係がヒエラルキー型のピラミッド型のものであるならば、それは同じように瓦壊する可能性を秘めていると思います。このような例は、なぜネットワーキングが大事であるのかということを考えるに当たって、1つの参考になるのではないのでしょうか。

まさに重要なのは「参加」ということです。私はこのネットワーキングは新しい形の民主主義だと思っています。権限をだれかに委譲して、その人たちに何かをやらせるというような代理

的なものではなく、常に自らが参加していくということが、まさにネットワーキングで重要なことになるわけです。

リップナック ネットワーキングの重要性について少し補足してみたいと思います。世界が非常に混乱し、さまざまな問題がある中で、問題の解決の有力な武器になるのがネットワーキングであると考えています。

いかなる個人も、いかなる強固なヒエラルキー、ピラミッド型の組織も、またいかなる官僚制もそうした問題を有効に解決することはできません。そしてさまざまな問題の解決というのは、場合によってはある地域に偏っていたりすることがあるわけです。

我々はネットワークを通じてそうした解決をお互いに共有し、お互いが1つになって分けあ

う必要があるわけです。そのことによって初めて温室効果、オゾン層の破壊、あるいは酸性雨などの地球環境問題も、みんながそれぞれ力を合わせることによって解決することができると思います。

世界中の人々が一堂に会することによって、そのような形のネットワーキングを実現することは物理的にはできません。そのようなネットワーキングは、いわばこれまで発達してきたテクノロジーの恩恵を受けることによって初めて可能になるわけです。

そういった意味で、我々はテクノロジーに関するネットワークというものも非常に重視し、人々がそうしたテクノロジーを十分活用できるようにすることを進めていく必要があると思います。

ネットワーキング社会の全体的ビジョン・チャート

A 英知の交換		B 人間の復活			C 生命地域	
I 場	II 学習	III 女性	IV 価値	V 生活	VI 地域	VII 環境
1. ネットワーキング ①壁を越える ②対等な関係 ③脱セクター	4. 等身大の教育 ①小さな学校 ②コミュニティスクール ③フリースクール	8. 両性均衡化 ①脱男性優位 ②全日制住民 ③脱優位・支配の論理	11. 生命中心 ①生命の尊重 ②生命系重視 ③動物の権利	15. 農的生活 ①田舎暮らし ②プロシューマー ③自発的簡素	18. エコ・シティ ①風水(天地) ②リサイクル ③都市エコシステム	22. 適正技術 ①地元の資源 ②伝統技術 ③脱公害
2. 土との交歓 ①市民農園 ②クライン・ガルトン ③グラウンドワーク	5. 環境教育 ①エコロジー ②生命の尊重 ③「する社会」	9. 母性の復権 ①生命の重み ②新夫婦関係 ③生命体としての地球	12. 平等 ①脱差別 ②ネットワーク組織 ③脱専門家	16. 自身の仕事 (オウン・ワーク) ①脱賃労働 ②やりがい ③ボランティア	19. 自給自足 ①農業再生 ②代替生産 ③地元消費	23. 自然エネルギー ①脱石油・原発 ②「小エネルギー」 ③エネルギーの地元消費
3. 等身大のメディア ①ミニコミ ②パソコン通信 ③草の根の国際交流	6. 創造性重視 ①人間開発 ②加減主義 ③革新的学習	10. アジアと女性 ①もうひとつの開発 ②知足・正命 ③開発教育	13. 非暴力 ①脱戦争 ②脱強制 ③共生	17. ホリスティック・ヘルス ①脱薬漬け ②心身相関 ③伝統医療	20. 弱者尊重 ①脱青年偏重 ②コミュニティ教育 ③正常化	24. 地球環境 ①脱工業 ②脱経済侵略 ③緑の価値
	7. 学習社会 ①生涯学習 ②文化の伝承 ③地球的視野		14. 自律 ①個人の自律 ②地方の自律 ③国家の自律		21. 参画的自治 ①権利の奪回 ②参画的合意形成 ③責任の回復	

(出所：日本ネットワーカーズ会議「ネットワーキング社会への道程図」, 89年11月, 9ページ)

逗子のまちづくりと市民の情報主権の確立

逗子市長 富野暉一郎

1. 逗子のまちづくりと市民自治

リップナック・スタンプス御夫妻のお話を聞いて、私は大変感銘を受けました。まず、何とんでもお二人は私にとって本当にあこがれの人だったわけです。

「ネットワークング」という言葉を聞き、「ネットワークング」という本を読んだのは、お二人のものが初めてでしたし、本当に遠い存在の人だと思っていたのですけれども、こんな身近でお会いできて感激しています。

私の話に入る前に、実は先ほどのお話について3つほど感じたことを申し上げたいと思います。

1つは中国の問題で、実は私も天安門事件があった時に、中国の友人や知人からファクシミリ通信を受けました。やはり日本でも同じように、中国からの情報が非常に広く流通していて、私もその当事者の1人だったということで、大変感銘を受けてお話を聞きました。

それから、昨日、中国から来た人と話したのですけれども、その中でも中国における情報化についていろいろな議論があったので、大変い

いタイミングでお話を聞くことができました。

それからもう1つ、民主主義と情報の結びつきに関するお話がありました。これはまさに一種の市民自治がこれからさらに深まっていく中で、この関係はさらに明確になってくる問題ですので、そういう点でも同じような事だと感じました。

特に私どもは「情報のループ」ということをいっています。つまり、情報を一方的に流すだけではなく、情報が行って帰って、行って帰ってということ、を、「スパイラル」といわれていましたが、私どもは「ループ」といっています。全く同じような状態で情報の問題を扱っているということで、大変感銘を受けました。

それから、日本とアメリカで違いがあると思う点は、実はコンピュータ・ネットワークにする、日本の場合は非常に個人で充足してしまう、あるいはグループの中で充足してしまうということがあるのですが、私が前に接した「メタネット」というアメリカのネットワークなどでは非常に行動と結びついている。

つまり人に向かって開放的であるということが、非常に大きな違いとしてあるといえるのではないかと思っています。そのことはまさに日本における今後のネットワークングの問題点としてあるのではないかということを改めて感じ



ました。

まず第1に、逗子の市政とはどういう市政であるのかということから本題に入りたいと思います。

逗子では市民自治を実践しています。市民自治の概念は、先ほどのネットワークの話でもあったのですが、だれかが指導者として君臨して、その人のもとに政治が、行政が、運動が行われるということはやめておこうではないかという考え方があります。

1人1人が政治の担い手、民主主義の担い手、自治の担い手として主体的な判断と行動ができるまちのあり方、政治のあり方というものを模索していくということが、逗子の市民自治の根幹であると思っています。

したがって、ここで行われる運動、あるいは行政というものは、基本的には横に広がった、網の目につながったネットワークそのものであるということが基本にあると思います。

なぜ逗子の政治が市民自治になってきたかといいますと、これはまさに池子の森を守っていく運動が、指導者あるいは指導的な団体とか、あるいは政争などによってリードされてきたものではなかった。

むしろ1人1人の、政治について全く無知で

あった、あるいは運動については参加したこともなかった主婦の1人1人の判断と行動が中心になった運動であったというところから出てきた市政ですから、当然のことながら市民自治というものはネットワーク型のものでなければならなかったわけです。

2. 情報公開の問題点と市民の情報主権

私は情報政策について、施政方針演説でも何度か話しましたが、その基本は要するに「情報主権」ということだと思います。

「情報主権」がどういう形で確立されるのかというと、まちづくりには市民の参加が必要ですが、市民が参加するためには十分な、そして適確でフレッシュな情報を市民が全体として持っていなければいけない。それでなければ、まちづくりのために行動し、考えることはできないのではないかとこのところから始まったのです。

ですから、何かをする時に情報がなければいけないということは、民主主義の根幹だと思います。

したがって市民が政治をするためにはまちの状況についてあらゆる情報が手に入る状態が必要であるということがまず第1にあります。そしてそれを保障するものとして、私は市の中に情報のループを作っていくべきだろうといっているわけです。

「情報公開」がうまく機能している例は、なかなかないのではないのでしょうか。それは情報の公開が一方的な情報の提供に終わることが非常に多いからだと思います。

要するに、情報が行政にどう返っていくのか

ということです。つまり行政の方から住民サイドに流れるだけで、そのフィードバックがうまくできていないところがあります。

それからもう1つは、フィードバックができないというだけでなく、情報そのものの鮮度が欠けている、つまり未成熟情報が住民に流れていかないということもあると思います。

返子の場合は、そういう意味で、未成熟情報を含めてすべての情報をどのように市民に把握してもらうか、そしてそれを受け取った住民が再度行動や意見という形で市政やまちづくりにそれをどのように返していくか。

その返してきた情報によって市の行政が、政治が変わって行って、さらに新しい情報がそこから生み出され、それがまた還流していくというように、何段階にもループ状になって還流していく情報の流れを作っていくことが、市民自治、あるいは市民によるまちづくりを完成させるものになるだろうと考えています。

そのために「まちづくり懇話会」というものを作ったわけです。まず第1に、情報の受け手にとって大事なものは、確定した情報、あるいは成熟した情報ではないということです。こういうことが決まったということをいくらその場で知らされても仕方がない。

つまり、「道路をここに作ることにしました」「公民館はここにこういう形で作ることにしました。皆さん、ご意見はどうですか」「まちをこれからこういうようにしたいと思いますが、皆さん、ご意見はどうですか」ということが住民参加、あるいは情報提供であると思っている自治体が大変多いわけですが、私はそうではないと思います。

今、まちにこういう問題がある。そして実は行政はこれだけいろいろな問題を抱えて困っているのだけれども、どうしたらいいのだろうか。

あるいはその解決策として幾つかのケースが考えられる。それをどういう基準で選んでいったらいいのだろうか。

つまり政策を決定する、あるいは決定しかかっているものを住民に提供することによって、方向づけをするのではなくて、政策を決める前に、その方向づけ、あるいは概念づけから住民が参加していくという意味での参加が、実は非常に大事だろうと考えています。

3. まちづくり懇話会の活動

「まちづくり懇話会」は、まさにそういうことを目的にして作られました。つまり市のマスタープラン、あるいは情報政策、まちの景観をどのようにしていくのかというような市の基本的な将来像を決めていくテーマが出てきますが、「まちづくり懇話会」を作って対応してきたわけです。

「まちづくり懇話会」は、専門家が3分の1、公募した住民が3分の1、そして内部から自分でやりたいと出てきた、職務に関係のない分野で選ばれた、あるいは応募してきた市職員が3分の1で構成されています。

そこで行政側は全く方向づけをすることなしに、問題について皆さんに、枠組みや方向づけを考えていただきたいというやり方をしています。ですから、最初は全く何もでてこなくて、シーンとしてしまうわけです。議長とか委員長も決めません。30分くらいは何をしていいのかわからなくて、お互いに顔を見合わせてしーんとしているという状態から始まるわけです。

しかし、そういう中で少しずつ対話が始まり、そしてわからないところが明確になってくる。

住民の皆さんは情報を非常に狭いところから発想してきますから、自分の生活の中からの発言しか最初はできませんけれども、行政の情報とか専門家の先生方の意見を聞いていくことによって、いろいろな意味で考え始めます。

専門家も自分の学識のレベルではとても話ができないので、小学生に話すぐらいのところから探りを入れていって、だんだんいろいろな話をして、そして住民の生の声を聞いていく。また、行政の現場そのものを見ることから入っていく。

それから職員の方は住民は怖くない、先生方は偉くないということ、会話の中から学んでいくということで、約1年かかってどうやらおいしいお雑煮の味になってくると、提言を次々と出しているわけですね。

実は行政側は、そういうことをして出てきた方向づけをいただいて、それを今度は専門家の目や行政マンとして行政の中でどのように位置づけができるかということで、計画に乗せる手順をしていく。そして計画ができてきますと、それを再度住民参加にかけていくという方法を取っています。

情報公開制度は、実は大変時間がかかっているのですが、来年、情報公開制度を最終的に市として作ることになっています。このように8つの部会から提言が次々に出されており、それに沿ってまちづくりを進めるということが、今逗子では行われています。

そういう中で、実はパソコン・ネットワーク、つまり市民が主体となった情報ネットワークをどうやっていくのかという問題が出ています。

市民が主体となった情報ネットワークの問題がどうして出てきたのかといいますと、実は高度情報社会というものが温かい社会なのか、あるいは管理社会として冷たい社会なのかという

選択をだれがしていくのだろうかという問題があるわけです。今まで高度情報社会というのは非常に危険な社会、管理型社会で冷たい社会になるだろうと思われていたと思います。



しかし、先ほどリップナック・スタンプス御夫妻がお話になったように、高度な情報技術を住民サイドが自分たちのパワーとして使った場合に、その社会はむしろ管理型社会になるよりは、温かい、人の心の通い合う社会にすることができないのではないかと。

そのことが、実は、逗子の「まちづくり懇話会」の中で、情報ネットワークシステムについていただいた提言の一番基本的な概念として、私どもがとらえているところです。

4. 逗子における地域情報化の方向

それはどういうことかといいますと、要するに情報の受け手だけではだめだということです。市民が自分たちのまちを作っていく上で、例えば、これから高齢化社会になりますから、歩けないおじいちゃんがちょっと海岸に散歩に行きたいが、車いすでないと行けない場合、今のシ

システムでは、それを役所に届けてボランティアあるいはヘルパーを審査で選んで、さらに申請書を出してもらって、その上で対応することになります。

しかし、もっと小さな、お互いの結びつきでそういうことを解決する方法があるのではないか。ご近所の方だけでなく、1時間でもいいから自分に時間があり、何かボランティアをしたいという時に、もしコンピュータ・ネットワークがうまく作用すれば、そのおじいさんがちょっと操作するだけで、例えば「私がやる」という人を何人も見つけるという社会があり得るわけです。

これは市民社会を電子的に広げる、つまりコミュニティを時間的にも空間的にも有効に広げていき、人間のつながりを拡大していくという意味でのネットワークの使い方になると思います。

いろいろな意味での助け合いなどを通じて、市民たち自身がそのような可能性をお互いの情報交換の中で解決することもできると思います。公権力を借りることなく、「公・共・私」という役割分担がもしあるとしたら、「共」の部分ネットワークを作り上げることによって膨らませ、温かい社会を作っていくこともできると思います。

そういう意味で、ホットコミュニケーションの1つの手段として、パソコンやワープロなどをネットワークの道具として使っていくことができるのではないか。そのようなことが、実は、私たちが一番目的としたい高度情報社会のあり方ということになってくるのではないかと思います。

実は、逗子は今年の夏、通産省のニューメディア・コミュニティー構想の指定地域になったのですが、他の地域と少し違った点があります。

市民型のコンピュータ・ネットワークを作ることをまず対象にして、その次のステップとして「サテライトオフィス」を考えていこうということで、通産省の指定を受けました。

今年度は研究、広報を中心に行っており、今年度の土曜日に逗子市ではそのための講演会を開催して、市民の皆さんにまずコンピュータ・ネットワークについて知ってもらうことを計画しています。

そしてその中から市民で組織が作れるような状況に持っていこうとしています。あくまで市側はバックアップしたり、場の設定を行ったりすることなどのお手伝いをさせていただくことを考えています。

そういう中で、これから逗子のパソコンネットワークが非常に特異な形で出てくると思います。行政は決して情報を出す主体にならないといえますと、ちょっと奇妙に聞こえるかもしれませんが。

情報公開制度を持っていて、パソコンネットワークを持っていて、情報提供する主体にならないとはどういうことか。情報というのは市民が主体的に獲得していくものだと私は思っています。

ですから、市民がみずから獲得することについて、行政は徹底的にバックアップをし、その場づくりをしなければいけないが、行政が過剰に表に出ることは非常に問題があると思います。

来年度、パソコン・ネットワークを作る時に、市民のサイドでホストを持っていただき、そして行政側はもし資金や機械が足りなければ、あるいは場所がなければ、それらについてはバックアップするけれども、システムの構築やシステムのあり方自体については、市民の皆さんに勝手にやっていただく。そして行政側は要求された情報を出していくことだけに実はしてい

たいと思っています。

「まちづくり懇話会」で少し市の方が先行し過ぎた感じがありますが、市民の皆さんが自分たちが黙っていても市がやってくれると思うようになるのが一番怖い。やはり、民主主義は市民が動くことで初めて動くものだということが一番大事ですから、私たちがパソコンネットワークを作っていく上で、そういう考えで進めていきたいと思っています。

そのような経過で逗子の情報化は進んでいますが、いずれにしろ私たちが、今までの経験で知っていることは、パソコンネットワークというのは市民運動にとっては非常にパワフルなツールであるということです。

なぜかといいますと、今までは情報伝達のために我々は最大限の努力をしなければいけなかった。とにかく手紙を書き、人に会い、そして少しずつ情報を広げていくためにものすごい苦勞をしました。

しかし今は、例えば、池子の問題1つにしても瞬時に世界中にネットワークを通じて知ってもらうことができます。そしてまた世界のいろ

いろな運動の現状を瞬時に、我々の情報として運動の中に取り込むことができると思います。

そして、実は池子の運動というのは国際的にも意見書をいただくような運動でしたが、コンピュータ・ネットワークを使って非常に大きな成果を得たという点で、先ほどの北京の例と全く同じ要素を持っているのではないかと思います。つまり我々が情報を行動の中で使っていくことをやり始めれば、社会が変わっていく、民主主義が変わっていくと思います。

しかし、日本の現状にあるような自分たちの仲間だけで充足してしまう、そして自分たちの中だけで閉鎖的に自足するネットワークが育っていった場合には、管理社会が進行する中で、自分たちだけの狭い場所でのデモクラシーとは関係ない、タコつば社会の細分化しか日本では起きてこないのではないかと思います。

とにかく日本におけるネットワーキングというものは、これからいかに行動と結びつか、そしていかに外に開いていくかということを考えながら進めていく必要があると考えています。どうもありがとうございました。(拍手)

リップナック+スタンプス氏の人としごと

ジェシカ・P・リップナックとジェフリー・S・スタンプス両氏は、アメリカでネットワーキング研究所を開設している。

同研究所は、調査研究とコンサルティングを行う会社であり、人びとがもっと効果的に協同して働くことができるようにするために、ネットワークを用いることやネットワーキングすることに貢献することを目的として、1982年に2人によって設立された。

ネットワーキング研究所の具体的な仕事は、ネットワーキングの事例の講習を会社に対して行ったり、コンピュータ会議のシステムの設計をするなどとなっている。代表的な顧客としては、アップル・コンピュータ、デジタル・エクイップメント社、マグロウヒル、マサチューセッツ工科大学など。

一見すると、ネットワーキング研究所のねらいは

技術のネットワーキングをすすめることによって、生産や管理の効率をあげることにあるように思えるが、その根底には、技術のネットワークは人間のネットワークをささえるためにあるという思想がある。

その思想は、リップナックとスタンプスが共同で著し1982年に出版した「ネットワークング：最初の報告と要覧」に結集している。この本は、いろいろな領域における組織形態としてのネットワーキングを探求し、人びとのネットワーキングが、企業社会としてのアメリカとは異なる“もうひとつのアメリカ”を形づくりつつあると述べている。さらに、さまざまな活動をしている団体についてクロスして参照できる1,500におよぶ索引も載せている。

「ネットワーキング」は、日本においても翻訳され、プレジデント社から出版された。

問題提起に対するコメント

ネットワークデザイン研究所 会 津 泉

僕は逗子で育ち、小さい時によく弾薬庫が爆発すると逗子は全部すっ飛んでしまうということを知られて育ちました。残念ながら高校を出てからは東京に住んでいますので、大分遠い存在になってしまったのですが、逗子を再び僕に近づけてくれたのが池子の運動だったわけです。

逗子市は、僕が小さい頃はとてもそういうことが起きそうもない、神奈川県でも一番静かな問題のないところだったと思うのですが、世の中が変われば変わるということの1つの証明でもあると思います。

丁度僕が会社をやめて、次に何をしようかと思った時に、ある人を介して横浜に呼び出されて富野さんと会って、コンピュータ・ネットワークとは何かという話を一生懸命説明しました。

その時の目的は、丁度知事に対する意見書提出の問題などがあり、何とかアメリカの関係者なり、その周りにいる人たち、あるいは神奈川県知事あてに市民の声を送るのにコンピュータ・ネットワークを使えないだろうかという要請があったので、調べてみましょうと非常に軽い気持ちで返事をしましたが、本当はほとんど当てがなかったのです。

ネットワークを使っている人間をたどっていけば何とかなるだろうと思いましたので、増田先生の紹介もあって、その1つとしてリップナック、スタンプスのボストンの研究所にも行ったわけです。

あの時、彼らの研究所のコンピュータ・デー

タベースの中にあっただ中から、キーワードでいろいろ選んで、7百ぐらいの団体のあて名ラベルをもらいました。富野さんにもほとんど相談しないで勝手に1枚のアピール文を作って、その7百の団体へ出してみたわけです。その中で、確か90ぐらい戻ってきたような記憶があります。全体ではもっと集まったのですが。

コンピュータは万能ではありませんし、やはり相手は人間ですから、無視する人もいれば、忙しくてやっていられないという人もいたのですが、結果としてかなりの数の返事がありました。

ずっと話の中では、人間のネットワークとテクノロジーのネットワークという2つの側面に関わる話がありました。80歳の老人の事例にしても、環境とテクノロジーの問題にしても、基本的にはそれらの問題は避けて通ることができないものだと思っています。

それには2つの意味があります。もちろんテクノロジーの側から見て、人間の問題は避けて通れない。しかし人間の側から見てテクノロジーは避けて通れない。我々は、自動車やコンピュータを使うことをやめるわけにもいかない。

まだ、選択の余地があるかのように思われるかもしれませんが、いずれ選択の余地がなくなってくると思います。これはいいとか悪いとかではなくて、その時に人間の視点というものをどこまで深く持つことができるかということがポイントになると思います。

今のリップナック、スタンプスのお二人のお

話に関して、質問と感想があります。

まず質問から申し上げますと、確かにネットワークというコンセプトがアメリカで始まって、「アナザーアメリカ」という非常にパワフルなスローガンが生まれたわけですが、これからどこへ向かって進めばいいのか。「ネットワーク」という言葉は随分と広がりました。

確かにコンピュータを使って、あるいは使わなくても市民運動の中でネットワークという考え方は随分あり、すばらしい例もあります。でも、それで果たして問題が解けていくのだろうかという疑問が残ります。どこに我々は最も力を入れるべきかということ、アメリカではどう考えられているのでしょうか。

あえて少し冷たく申し上げますと、確かに中国や東ドイツの問題にアメリカのメディアも市民もみんな一生懸命です。国内にある麻薬の問題、エイズの問題なども一生懸命に取り組まれていると思いますが、新しい花火が上がるとまたそちらへ行くというようにして、どうも本当に確実なネットワークができていくのかという点については、必ずしもそれほど肯定的な回答ができる状況ではないと思っています。

その点に関しては多少僕の誤解があるかもしれませんが、御意見をお聞きしたいと思います。

私の考えているところでは、パソコン・ネットワークを通して、先ほどのテクノロジーと人間の問題も含めて申し上げますと、価値観の違う人たち同士がいかにコミュニケーションするかということが、これからのポイントであると思っています。今日も確かに非常に多様な方が出席していますが、残念ながら大きく括ると、「草の根市民運動」に割と近い人が多いと思います。

お金もうけを必死でやって、それで市民を馬鹿にしたりしているような人、あるいは役所の

中での立場の方を、自分の個人としての考えよりも優先させている人は、世の中にたくさんいるわけです。でも、彼らと僕たちとはどうやってコミュニケーションするか、その場を持つのか持たないのかということも重要だと思います。

さっき富野さんも指摘されたと思いますが、同じような仲間だけで充足してしまっていることがないかどうか、自省してみる必要があると思います。

このような傾向は、パソコン通信の中でもよく見られますし、そうではないところでも「あれは市民運動だ」とか、「あれは企業だ」とか、「あれは公害企業だ」とか色分けするわけですね。果たしてそれでいいのだろうか。

そのための手段なり運動のつくり方を、市民運動をやっている人たちも、その反対の企業の人たちも考えていかないと、お互いに自分の影を作り出して、そのおぼけを片づけることができないままに、その傾向は悪い方向に向かうのではないかと思います。

少し肯定的に言えば、テクノロジーを上手に使ったり、人間的な側面をうまく使うことによって、価値観の違う人たちあるいは意見の違う人たちの意見を変えさせる、あるいは自分の意見を変えるということを通して、もう少しましな方向性が逗子に限らず社会の中に生まれてくる可能性があるのではないかと。そのようなことがないと、例えば、現在の日米関係の問題にしても、国内の問題にしても、なかなか簡単に片づかないのではないかと思います。

ネットワークというのは、多分1つのキーワードだと思っておりますが、もっと進化させた、それこそアクションにつながるような形で深めていかなければならないのではないかとというのが私の意見です。

ですから、次にネットワーク会議をやる時

には、ビジネスの人たちも、役所の人たちも、市民運動の人たちも同じ場で討議することができるようなことを追求しないと、大変問題があるのではないかと思います。

つい最近韓国に行きましたが、韓国でやはりパソコン通信を一生懸命やっている人たちと交流して、非常に楽しい思いをしました。言葉はなかなか通じないのですが、身近なところに同じような問題を抱えている人たちがたくさんいます。

ソ連にも今ネットワークがありますし、ハンガリーにも出てきていますし、だんだん東西の境界がなくなってきました。その意味でも、今逗子でやっていることは貴重な実験ですし、それをさらにグローバルに結びつけていくことを考えるのが必要ではないかと思います。

多少生意気なことをいいましたが、以上が感想です。

質 疑 応 答 2

司 会 どうもありがとうございました。

今、会津さんからリップナック、スタンプスさんに質問も出ていました。皆さんとの間で意見交換をする前に、会津さんが提起された問題には非常に重要な問題が含まれていると思いますので、お二人からまずその辺についてのコメントをいただきたいと考えています。

スタンプス アメリカにおいては、さまざまな分野やトピックに関するネットワークが行われています。我々が注意しなければならないのは、ネットワークそれ自体がいいものか、悪いものかという価値判断をしないという点です。

ネットワークというのは1つの共有化された価値に基づいているものであり、その価値をどうとらえるか、それに賛成するか反対するかというのは当然人によって異なってきます。

その例を申し上げますと、アメリカで最もエネルギー的な力を持ったネットワークというのが2つあります。その1つは、中絶に反対する人たちのネットワークで、非常に力を持ち、行政に対しても影響力を持っています。これがレーガン政権を生み出す1つの大きな母体となったわけです。

もう1つは、いわば選択の自由を認める、すなわち中絶に賛成する立場の人たちのネットワークで、これも大変な力を持っています。つい数週間前、ある州では中絶を認める知事を選ぶことに成功しています。

それからもう1つどのようなネットワークがあるのかといいますと、これは恐らく皆さんも反対すると思いますが、国際的なロリストのネットワークがあります。もう1つ、同様な価値観を共有している人たちのネットワークとして、国際的な麻薬取り引きのためのネットワークがあります。

こうしたテロリストや麻薬取り引きについては、いずれも強烈なリーダーといったものが存在しません。いずれもそれぞれの組織が大変緩やかな形でお互いに関係を持ち、お互いに結びついているわけです。こういった組織を考えてみても、これはまさに私の申し上げたネットワークと非常に組織的には似ているわけです。

そうしたことを考えてみますと、これからネットワークというのはどこへ行くのだろうかという先ほどの質問、あるいはどのようなビジョンを共有したらいいのだろうかという質問に関しては、共有され得る価値として私が挙げたいのは、全体性を持った1つの地球のイメー

ジです。とりわけ、宇宙規模で考えなければならない時代において、非常に重要なことだと思います。そうした一体化された1つの地球というイメージがビジョンとして考えられるのではないのでしょうか。

それからネットワークに関しては、アメリカでもいろいろなものがその目的や価値観ごとに現れ、消えていくわけですが、唯一数の上でも増加して、そして力をつけてきているのが環境問題に関するネットワークです。

実際、この分野は今後も非常な広がりを持ち続けると考えています。我々はやはりきれいな空気を吸いたいし、また温室効果のような地球規模の環境問題を考えてみますと、当然のことながらこれには国境がありません。まさにグローバルなネットワークを形成する必要があるわけです。地球規模で考え、地域規模で行動するということの1つの重要な分野が、この環境問題だと思っています。

司 会 それでは、これから質問だけではなくて御意見も受けていきたいと思います。

質 問

先ほど会津さんが価値観について人間同士のネットワークがこれから重要になるのではないかといわれました。これは私個人の感想ですが、例えば、職場とか会社の一員としている場合と、アフター5の自由な時間に、パソコン通信をしている時の1人の人間としての段差が非常に大きくなってきています。その点が今現在どのような感じに映っているかといいますと、職場で非常に疎外感を感じています。

会 津 特にパソコンのネットワークを始めますと、そういうことが多いようです。価値観が違うということで、まず衝突が起こります。つまり今までのやり方でいえば、アフター5とそれまでとの間は完全に分けられています。

ところが、分けたくても分けられなくなる、あるいはアフター5で得ている価値をその職場の中に持ち込もうとすると、どうしても衝突することになるだろうと思います。

恐らく教科書的な答えはどこにもないと思いますし、むしろ当初は必ずといっていいほど、大体どこでもそういう衝突が起こると思います。これは避けて通れないのではないかと。

くたびれたら交代すればいいではないか。だから、自分1人で頑張ろうとするとまずいから、そうしたらボタンタッチする。あるいは辛かったらやめてしまえばいい。

それをガンバリズムで、とにかくずっと自分1人で頑張って、状況を変えようとする、そんなに個人個人は強くないですから、むしろ弱い者は弱いなりに、弱い者同士で知恵を出し合うような感じにしないと、さっき富野さんいわれたと思いますが、強い解決をしようとする、力と力を両方高くしていかなない限り、なかなか解決できないことになるのではないかと思います。

リップナック 日曜日にやはりこのような会議を持った時に、NTTに勤める女性が、今と同じことをいっていました。5時まで自分は官僚で、5時以後はネットワークだといっていました。

それは、まさにみんなが抱えている問題だと思います。ですから、それはネットワークのあり方をどのように考えるかということであり、みんなで解決していかなければならないことだと思います。

もちろん転職するなどのより大きなリスクを負うことによって、そういったことの解決を図ることも考えられると思います。それによって自分がより納得できる仕事をする、よりハッピーになることもあるでしょうが、同時に

そのことはリスクを伴う分だけ浮き沈みがあり得るわけで、そのことについても多分会津さんから、経験に基づいたコメントがあるかと思えます。

やはり自分が信じる、あるいは自分が共感する価値をそのまま実践するような形で、パソコン・ネットワークで自分が信奉する価値を、できれば職場に持ち込んで、その仕事自体を自分の価値観に近づけ、そして問題の解決を図って、より安心できる状態にすることを、私としてはお勧めしたいと思います。

それから、自分の使っているネットワーク自体を使いながら、少しずつ問題を解決していくことも考えられると思います。最初の点については、アメリカでは実際に企業の多くがさまざまな情報機器など、コミュニケーションの手段を持ち込むことによって、組織自体の形態が非常に抑圧的なものから、より自由なものに変わってきているという事例もあります。

質問 私が役所の中でいっている話と少し関係があるかもしれませんが、御参考に思い申し上げます。

もし仕事の場合そのものが、ネットワークの中でやっていることと関係があることだったら、むしろそれは一体化してしまって、自分の立場を全く変えて仕事をやることはあり得ると思います。

それからもう1つは、役所の中で実はネットワークをやるかと思っているわけです。つまり、行政の流れの中だけではなくて、情報交換を個人的にもネットワークでお互いにやれるようにすると、外でやっていることと中でやっていることが、かなり近づいてくる可能性があると思います。

ですから、自分と関係ない職場の人にも自分の考えが伝わっていく。あるいは自分と関係な

い職場の情報が自分のところに来るということで、役所内部のネットワーキングということも当然考えられます。

余り無理をしてやることはないのですが、もし仕事の中でそこにつながる部分があるとするならば、ドラスティックに考え方を変えてしまうことも、1つのやり方であるかもしれないと思います。

質問 リップナック、スタンプス御夫妻と会津さんに御意見を伺いたいのですが、パソコンネットワークというのは、お金もうけとしては余り売れていないのかなという気がするのですが、いかがでしょうか。

会津 半分はそうだと思います。だから一番僕らが苦勞するのは…。

よく企業をお客さんにしてコンサルティングをやろうとして、ネットワークを作るといいということを随分いうのですが、なかなか信じてくれない会社がたくさんあります。気の毒だと思いますが、早くやればいいのに、わかっていない。

ネットワークの1つのポイントは、ループとか双方向ということですから、ある種のボランティア、自発性、自分からよくしゃべるとか、積極的に問題を投げかけるということをししないと、なかなか使えない。

ところが、今の会社の中でいわれたこと以外のことを積極的にやるのは、かなりかったるいことだと思いますから、トップや経営企画の人はやってもらいたいと思っても、売り上げを今月中に30億円上げろというような枠組みの中で仕事をしている人たちには、そういう余裕がない。

ですから、これは経費が3億円安くなるとか、売り上げが20億円増えるという効果は簡単には証明できない。電話やファクシミリもそうです

が、コミュニケーションというのはなかなか形になってとらえられないから、そういう意味でも難しいものです。

しかし、そのことがわかる会社も増えてきていますから、やはり今までのやり方ではまずいということで変えようとする。例えば、松下の経理本部がいま1200人くらいでネットワークを始めていますし、富士通の例も最初のうちは、みんな「紺屋の白ばかま」で、社内で白い目で見られていたのです。

どこへ視察に行くかといえば、大分の地域ネットワークで「コアラ」というのがありますが、そこへ視察にいくわけです。市民がやっているネットワーキングのやり方を一生懸命学習して、取り込もうとする。

同じように、「ネットワーキング」という本が最初に出た時、大企業から非常に大きな関心呼びました。

スタンプス やはり同じような状況がアメリカにもあるのではないのでしょうか。アメリカでもコンピュータが本当に企業間に普及するのに大体10年くらいかかったと思います。

実際、世代の交代がないとなかなかコンピュータの利用、あるいはパソコン・ネットワークの普及というのは進まないのではないのでしょうか。大体、経営幹部の人たちはコンピュータのキーボードには触りたがらない。キーボードに触るのは、秘書の仕事だと思っているわけです。

若い世代の人たちで、よりコンピュータを扱い慣れている人たちが、企業で育ってくることによって、コンピュータが使われるようになってきている状況だと思います。

リップナック 会津さんがいわれたことに若干補足しますと、「ネットワーキング」が出た時には、その調査対象としてカウンターカルチャー、いわば既存の体制とか組織から外れたよ

うな対向文化の人たちを主に取り上げたわけです。

ところが、実際に本を出版してみると、むしろ対向文化の人たちからではなく、アメリカにおける大企業から非常に反響があったわけです。例えば、DECのような大企業や全米長老教会などの非常に大きな組織、団体から反響がありました。それは我々が全く予想しなかったことです。

実際、そのことはいかに大きな組織が自らの視点を変えて、組織を改革するという強い必要性を感じていたかということを示すものだと思います。

富野市長 実は組織の中でネットワーキングがどう機能するのかという問題については、それほど悲観的な見方をしていません。

むしろ、これから組織がネットワーキングをどうしても必要とするということがポイントだと思います。それはなぜかという、現代の社会は非常に複雑化し、高度化、流動化していますから、縦割り組織でよそのことを知らないで仕事が終わるかという、実はそうならないわけです。

公共サービスの質を維持していくためには、縦割り行政の中だけでは決してサービスの質を維持できないということがあるわけです。

そうなってくると、いかに縦割り組織と横の連絡調整を、うまく機能させていくことが非常に重要になってきます。その中で、要するに自発性による横の情報収集、あるいは情報の流通と、それから仕組み、組織としての横の情報の流れあるいは仕事の流れというもの、オーバーラップするのかもしれないかということが出てくるかだと思います。

私が職員にっていますのは、職員自らが活性化していかなくては行政サービスは達成でき

ない、つまり他の領域に関心を持たない、あるいは他の領域の情報については何も持っていないという職員は、これからは落ちこぼれていくだろうと知っているわけです。

これは会社にしても同じことだと思います。ですから、むしろ大きな組織こそ逆に横の情報の流通、ネットワーキングというものが要請されるでしょう。ただ、それが自主的に行われるのか、強制的に、あるいは何らかの誘導策を伴って行わなければいけないという違いだけであり、私はそれが組織を壊していくことには決してならないだろうと考えています。むしろ組織の柔軟性を高めていって、要するに適用力を大いに上げていくことになるだろうとみています。

大企業からいろいろな関心が寄せられたということは、まさにその部分に関していえることですし、日本の官僚制度についても当然それが重要な意味を持つだろうと、個人的には考えています。

司 会 これでは富野市長は退席されます。本日は本当にありがとうございました。(拍手)

引続き質問や意見を受けたいと思います。

質 問 私は東京会議にも参加したのですが、個人的な意見としては、みんながネットワーキングの本質というものを、少し誤解しているのではないかという気がしてなりません。

ネットワーキングというのは、何かソフトで温かくて、マインドがあって、ラブがあってという非常にメンタルなものであるのに、それを分析したり、課題で割ったりするという方向からのアプローチがなされているように思えてならないのです。

私は「人間ネット」という活動をしており、これは組織も何もなくて、あるのは人間と人間の心のつながりだけです。

それで私は課題ではなくて、環境問題、障害

問題、国際問題であろうと、どこにでも参加しています。それで分析するなどという問題は、関係がないことなのです。

リップナックさんと会った、スタンプスさんと会った、富野さんと会ったという人間のつながりを作ることが、実はパソコン・ネットワークを世界中に張り巡らすこと以上に大きな意味を持つのではないかと。

このようにいつも集まりに出るたびに、どうして隣の人と「ニコッ」とあいさつできないのだろうかと思います。

私たちは地球に生まれて、緑のきれいなところに住みたいし、きれいな空気も吸いたい。だから、問題や課題ではないと思うのです。すべての地球上の問題で自分に関係のないものは一つもないと思っています。

ですから、個々の人間のつながりを作ることが一番重要であり、私は2年間そういう活動をしてきて、確実な手応えを得ています。そういうところに何か今のネットワーキングの大きなポイントがあるような気がするのですが、いかがでしょうか。

質 問 同じような問題で発言させていただきます。

先ほどのスタンプスさんの図について、非常によくわかりました。私がこのフォーラムに来た一番の動機は、自分がいろいろなアクションやセミナーなどで、いろいろな人と知り合ったり、議論をしてきたら、何となくここに辿り着いたということがあります。

何かネットワークという考え方やコンセプトというのが、僕の場合、先にあったのではなくて、何となくそうなっただけです。

それで、先ほどからパソコンとかテクノロジーに関する問題が出ていましたが、そういうことを広げていく時に、僕の一番エネルギーにな

ったのは友達との信頼関係であったし、それからもう1つは人に出会うことによって、自分の世界が広がっていくことの楽しさのようなことではなかったかと思います。

ですから、ネットワーキングという考え方をとった時に、先ほどリンクをなるべくたくさん、いろいろなサイドで作るといった話がありましたが、何かそこが一番大事な点であって、別にパソコンの有無ということは余り関係がありません。

それよりも電話で話している方がいいし、できれば会った方がもっといろいろな情報が入るといった感じがするので、その辺の信頼関係やリンクの作り方などについて、もう少しコメントしていただけるとありがたいと思います。

リップナック 私も技術には強くなくて、マイクの使い方もよくわからないのが実態です。

実際、今の2人のお話は全くその通りではないかと思います。いろいろな分析とか、技術面ということも大事ですが、今感じていることは、そのような人間関係における信頼がやはりネットワーキングの本質であるということではないでしょうか。

ですから、ここにお集まりの皆さん、あるいは東京の会合の時に参加された皆さんが強く心に留めておくべきことは、ネットワーキングの本質というものが、そうした人間関係の信頼に基づくものであり、それが一番のエッセンスであることをはっきり理解することだろうと思います。

そしてネットワーキングがどういうものであるかということはまだ十分に理解していない人たちに、ネットワーキングの基本が信頼であることを伝えるという大きな責任がお集まりの一人一人にはあると思います。

そういった意味で、ネットワーキングの一人

一人が、リーダーであることを自覚したらいいと思います。

我々が人々との間に、あるいはグループの間に信頼関係を築くということは、本質的なものですが、我々はそのにはまだ到底至っておりません。ですから、逆にいうと、人に理解してもらおうといった意味で、場合によってはモデル、チャート、あるいは、例示といったものがその本質を理解するために役立つし、必要だと思います。

そういったものが場合によってはもっと必要であり、そして究極的にはそんなチャートなどが全く必要なく、信頼関係だけがそこにあるというものを作っていくことができれば、一番いいのではないかと思います。ただ、我々はそのにはまだ到達していません。

スタンプス ネットワーキングというのは、我々が作りだしたもので何でもなくて、それは非常に古い歴史を持った昔から行われていることであり、しかも非常に自発的に行われてきたものです。

常に非常に伝統的なもの、あるいは官僚的なものをいかに変えていくかということのために古来人々が行ってきたものがネットワーキングであり、いってみれば信頼関係の構築であると思います。

ですから、技術の発展ということがいいのか悪いのかといった二者択一的なことを考えるのではなく、技術の進歩の中でネットワーキングというのが、我々にとって1つのチャレンジになっているという受取り方をした方がいいと思います。

すなわち、我々は1つの信頼関係に基づいて、お互いがしっかりとネットワークとして結びつきながらも、どうしても地球規模におけるネットワーキングというものを考えると、技術の助

けが必要になります。

そうした技術面の進歩をいかに、我々の基本的な信頼関係を失うことなく利用できるのかという意味で、それは大変なチャレンジでもあると思います。往々にして技術の進歩によって、技術自体にとらわれてしまうということが生じやすいわけです。

逆に我々は技術を拒否することもできないわけで、面と向かってのコミュニケーションが限られている以上、離れた人とのコミュニケーションの際に、その技術をいかに有効に使うのかということが重要であり、必要なことだと思います。

司 会 どうもありがとうございました。

今日の議論によって「ネットワーキング」という1つの言葉でも、いろいろな角度からとらえられるものであることがよく分かりました。先ほどから議論が出ているようにテクノロジーに関するネットワークであるとか、あるいは会場の方からも御意見があったように、人間と人間とのネットワークが必要ではないかというよ

うに、いろいろな意見があったと思います。

リップナックさんとスタンプスさんが日本に来られた目的の1つに、日本の草の根の運動をやっている団体、あるいはネットワークと連携していける道を探りたいということがありました。

私たちとしてもその辺を今後の課題として取り組んでいきたいと思ひますし、リップナック、スタンプスさんもこれが最初で最後の来日になることはないと思ひますので、今後とも情報の交換をしながら、日米におけるネットワーキングに関する運動を進めていく必要があると考えています。

長時間どうもありがとうございました。

(本稿は、1989年11月15日に開催された当自治研センターとまちづくり情報センターかながわの共同主催のシンポジウム「かながわ情報ネットワーク・フォーラム」の記録です。文責はすべて編集者にあります。)

ネットワークキングに関する 問題提起をどうとらえたか

緒形 昭義 (建築家、横浜国大講師)
川崎 綾 (まちづくり情報センターかながわ)
佐藤 孝治 ((社)神奈川県地方自治研究センター)
鈴木 健一 (日本ネットワークワーカーズ会議事務局)
土屋真美子 (まちづくり情報センターかながわ)

1. 新しい社会システムの概念 としてのネットワークキング

川崎：横浜会議に参加して、リップナックとスタンプスの話を聞くと、彼らはカウンターカルチャーとしてのネットワークキングを提唱しているように思えます。つまり、ネットワークキングは様々な領域に存在するが、運動の側にとっても戦略としてのネットワークキングが必要ではないかというようなことです。

佐藤：日本でも、ビジネスサイドでは盛んにネットワークキングの概念を使うということが行われています。このフォーラムを通じて問題と感じたことは、市民運動の側が戦略的な概念としてネットワークキングを捉えているのかどうかということです。

緒形：リップナックとスタンプスは、アメリカで既存のヒエラルキーなチャンネルで解決できない問題を解決するための運動が、新しい情報ルートやシステムを生み出しているのを発見し、それをネットワークと抽象化して表現しているのです。それに対して会場からは、

ネットワークということはよくわかる、しかし、ネットワークで何ができるのかという意見も多かったように思います。

鈴木：日本の運動では、ただ集まるだけで、集まって次に何をするのかというところまでまだ発展していないようですね。21世紀には、それを発展させて、新しい社会システムや仕組みを作ることが必要となってくるでしょう。

緒形：今の社会のシステムはピラミッドの形態です。自分たちは連携しているという人たちも、その連携の仕方がピラミッド型になっていることが多いのではないかと思います。国を頂点としたピラミッド型の価値観が存在するのです。人間の知識を構成する概念は往々にしてピラミッド型なのではないでしょうか。しかし、ピラミッド型のシステムでもいろいろな問題が出てきていることも確かです。ですから、〈ツリー〉ではない〈ラチス〉(格子)のシステムを考えることが重要になってくるのです。しかし、会場に参加した人々は、ネットワークキングをシステム論としては受けとめていなかったようです。手をつなぎましょう、という程度に考えているように感じま

した。

鈴木：手をつなぎましょう、と言っている人たちも、感覚的にはシステムとしてのネットワークを理解しているとは思いますが。だからこそ、横につながっていこうとする行動になるのです。それを言葉としてはうまく言い表せていなかったのでしょうか。

佐藤：つまり、システムチックな思考に馴染んでいないということがあるのですね。アメリカの社会科学では、産業社会の問題などを分析し、理解する上で、フローチャートやマトリックスなどの図式を使うことがよくあります。リップナックとスタンプスも、これまでのアメリカの社会をシステム的に検討した上で、産業社会のあり方を変えるための概念としてネットワーキングという仮説を出したとみることができるのではないのでしょうか。

2. “人と人とのつながり” からの発展は可能か

佐藤：彼らの分析の仕方には、わが国の運動や理論構築を考える上で反映できるものが含まれていると思います。日本では、経済や産業のあり方を批判するにしても、マルクス主義的な分析の影響を強く受けてきました。それをどう総括するのかは別の問題ですが、彼らのアメリカ社会の分析の方法から学ぶ必要もあるのではないかと思います。会場からは、「ネットワーキングとは人と人とのつながりだ」という発言が出ていましたが、リップナック・スタンプスと会場の参加者の発言の食い違いは、これまでの産業社会に対する理解の仕方の違いということも背景にあるのではないかと思います。

鈴木：21世紀の脱産業社会を、産業社会と相対立するものと捉えるのか、あるいは単純に対立するものとは捉えられないという視点の違いということですか。

佐藤：そうですね。今までの産業社会のあり方を全面的にネガティブに受けとめるのか、それとも産業社会の仕組みの中で一定の部分を変えれば改革が可能であると捉えるのかということではないのでしょうか。

川崎：信頼や共感で人と人とがつながっていくことの重要性は言うまでもありませんが、問題はそのつながりをもって社会システムをどう変えていくのかということですね。

佐藤：人間の共感を大事にするという発想は重要だと思いますが、それだけではこれまでの産業社会の論理を乗り越える論理に結びつかどうか疑問ではないかと思います。共感を大事にするということは当り前のことで、そこから出発して今の社会のあり方をどう批判的に分析するのか、どう運動に結びつけていくのかが問われてきます。単に人と人とのつながりと捉えてしまうと、ネットワーキングの概念を義理人情の世界に矮小化してしまう危険性があるような気がします。

鈴木：人と人、心と心と言っている人たちも、訴えかけるためにそう言っているのであって、ビジョンは持っていると思います。

3. ネットワーキング理論の 政策的アプローチ

佐藤：私のよく知っているアメリカのコミュニケーションの専門家は、ネットワークの一人でもあります。彼は民主党のジェシー・ジャクソンの通信政策のアドバイザーとして

88年の選挙に関わってきました。ジャクソンが民主党をニュー・リベラリズムという考え方によって立て直そうとする中に、ネットワークングという考え方を持ち込んだりするなど、アメリカではいろいろな動きがありますね。

鈴木：アメリカでネットワークングの実態が相当あるということは、社会が多分化し人々が新しい仕組みをつくらざるを得ないようになったということでしょう。日本も今後さらに多分化する過程で、ネットワークングがキーワードになるでしょうし、新しい自治の仕組み、在りようとしても期待されます。そのためには、今の日本の政治にどうやってネットワークングの発想を持ち込み、ヒエラルキーを変えていくのが問題となりますね。

川崎：アメリカでは協同組合や医療システム、食料供給システムなどが地域で展開され、地域経済を含んだ地域の自立が図られつつあるのだと思います。日本では、ピラミッド型の統治形態に対していかに下から政策決定していくかという政治レベルでの自治への働きかけはあっても、地域は依然として自立やネットワークの基盤を欠いたままなのではないかという気がします。

鈴木：自治システムと生活が隔離されたままなのです。ネットワークングとは、暮しと政治を一体のものとしてつなぐシステム概念でもあるのです。

佐藤：リップナックとスタンプスは、7年前に「ネットワークング」という本を書いて「もうひとつのアメリカ」を提起しました。その後これまでに、彼らがその理論をもって現実の政策形成のプロセスに何か働きかけをしてきたのかどうか聞いてみたいところでした。

4. 既存の体制とネットワークング

鈴木：政党にネットワークの考え方を取り入れさせることはできるのでしょうか。

緒形：〈ツリー〉の形態が都合のいい場合と、〈ラチス〉の形態が都合のいい場合があり、二者択一というわけにはいきません。意思決定の場合には、完全に〈ラチス〉だとうまくいかないような気がします。ですから、政党を〈ラチス〉化しようというのは、組合や官僚組織を〈ラチス〉化しようとするのと同じで最後の課題でしょう。

佐藤：政党のメカニズムにネットワークングを適合させるというよりも、政党にネットワークングの概念や運動を無視できない存在にまで持っていけるのかどうかひとつの重要な課題だと思いますね。

土屋：ネットワークングの運動も〈ツリー〉と〈ラチス〉が混じったものですよ。

緒形：そうです。例えば、企業が〈ラチス〉を取り入れても、企業の利益最大化行動が完全に〈ラチス〉へと解体することはあり得ません。

佐藤：日本の産業構造は変わりつつあり、企業も生き残りに必死です。そのためにネットワークングの理論を貪欲に取り入れているのが実態だと思います。市民運動の側が人と人とのつながりというレベルのみで捉えている限り、経済効率性に基づく企業の論理に対抗できるだけの理論構築や多数派形成ができるのかどうか疑問があります。市民運動が政党や官僚機構の核心をつき動かす力を持ち得るのかどうかということは、目的意識を持ちなが

ら、今の社会の在りようを批判的に分析し、きちんと政策上で問題提起ができるのかどうかということにもかかっているのではないかと思います。

鈴木：これまでの体制と市民運動の間でせめぎあいが行われているわけですが、市民運動の側もただ対立するだけではだめだ、協調するところは協調して、お互いに新しい仕組みを作っていこうという考え方を持つようになってきています。21世紀には市民側が新しい仕組みづくりのパワーとなり得ることが求められています。そうしないと社会は硬直化してしまうでしょう。

5. システムチックな ネットワーキング概念の必要性

鈴木：東京の会議で、リップナックとスタンプスの考え方がシステムチックすぎる、脱産業社会を考えていくネットワーキング理論には、人間だけでなく生命系としてのネットワークの視点が必要でないかという意見が出ていました。

佐藤：そのようなシステム的な考え方には、アメリカの社会と日本の社会の違いも背景にあると言えるでしょう。社会の出来事、問題を観念的に捉えようとするスタイルが日本の側にあるのではないのでしょうか。一方で、アメリカのような多民族社会では、民族や文化という背景の違いによってひとつの問題に対する受けとめ方や考え方のプロセスが各々違うことが有り得るので、観念的な形での問題提起は相対的に受けとめられにくいのではないかと思います。そのため、客観的に理解しやすいフローチャートやマトリックスのようなものによって理解を深めざるを得ないのではないかと思います。

川崎：社会の違いがあるにしても、日本の市民運動にシステム的な面が欠けているのはやはり問題だと思います。

土屋：そのシステム的な面が日本の市民運動に生かされるのならば、今回の会議は意義があったと言えるのではないのでしょうか。

(本稿は、12月20日に事務局で総括討論をした時の記録です。文責はすべて編集者にあります。)

ネットワーキング社会への道程図

日本ネットワーカーズ会議

目 次

- 1 ネットワーキングとは？
 - 1-1 はじめに～ネットワーキングとは～
 - 1-2 2つのネットワーキング

- 2 ネットワーキングのひらく社会ビジョン（省略）
 - 2-1 はじめに～ネットワーキング社会の全体的ビジョン・チャート～
 - 2-2 ネットワーキング社会のラフ・スケッチ

- 3 ネットワーキングを展開するうえでの問題点と打開策
 - 3-1 はじめに
 - 3-2 ネットワーキングとネットワーカー
 - 3-3 ネットワーキングのサポートシステム
 - 3-4 ネットワーキングの手法

- 4 ネットワーキング社会へのプランとネットワーカーのしごと（省略）
 - 4-1 はじめに
 - 4-2 生命系のネットワーキングへの潮流
 - 4-3 ネットワーキング社会のためのマトリックス

〔参考文献〕（省略）

1. ネットワーキングとは？

「ネットワーキング」という言葉を多く
の人が使うようになった。

そもそもネットワーキングとは、どうい
う意味を持つ言葉なのか？

「ネットワーキング」という同じ言葉を
使っているのに、その意味がずいぶんと
違うなと思われていることがある。

いま使われているネットワーキングは
どちらなのか？何を意味しているのか？
そして、あなたのネットワーキングは…。

1-1 はじめに～ネットワーキングとは～

近年、「普通のひとびと」が、さまざまな領
域や地域で「いのち」に価値を据えた活動を展
開している。現在その裾野は、広く豊になりつ
つあると考えられる。現実の活動として、保健・
医療、子育て、有機農業、適正技術、エコロジ
ー、学習、老人、障害者、平和、文化、ミニコ
ミ等の各種領域でのネットワーキング、さらに、
地域レベルやグローバルなネットワーキング、
メタネットワーキングなどが展開されている。

「ネットワーキング」という言葉は、1984年
にJ. リップナックとJ. スタンプスによる同
名の著書（プレジデント社刊）が日本に紹介さ
れ、またたく間に社会に浸透した。「ネットワ
ーク」という概念は、「共通の価値観や目的意
識を持つ人々が、これまでのイデオロギーなど

にとらわれず、地域や職業を越えて社会資源を
共有するために情報を交換すること」という一
般的な意味で用いられるが、両氏が意味づけを
行った「ネットワーキング」にはさらに特別な
意味内容が織り込まれている。

すなわち、「ネットワーキング」とは、「もう
ひとつのアメリカ」を造り出すために「異なる
イデオロギー や活動を越えて基層的価値を共
有する人々がヨコに緩やかにつながり、生活の
レベルからさまざまな問題に対処していこうと
する」ことを意味している。「ネットワーク」
とは、人々を結び付け、活動・希望・理想の分
かち合いを可能にする絆（リンク）であり、「ネ
ットワーカー」とは、ネットワーキングという
行動の主体を指す。

言葉はあくまでシンボルであり、言わば「殻」
のようなもので、その殻の中にどのような意味
を盛るかで、およそ異なった文脈の中で使用さ
れる。私たちがここで問題にしようとしている
「ネットワーキング」は、現在の時代状況を踏
まえたネットワーキング論あるいはネットワ
ーク論であり、またネットワーカー像なのである。
1980年代に入って、「ネットワーキング」や
「ネットワーク」が注目されるようになった背
景には、世界観あるいは、認識の枠組みの変化
があると考えられる。すなわち個人と世界、人
間とそれを取り巻く環境、意識と身体など、あ
らゆるものが複雑な関係性の綾を成しているこ
とが強く認識され始めたことである。特に市民
活動においては、もはや単一問題型の異議申し
立ての活動のみではいろいろな要因が複雑に絡
まって生ずる現代の諸問題を本質的に解決でき
ないことが明らかになってきた。

そこで、市民の側から構想や代替案を提示し、
「もうひとつの生き方」を実践する緩やかなヨ
コ型の活動が生まれ、さらに、その中の構成員

がさらに重層的に別の「ネットワーク」へとつながっていくという「ネットワーキング」が注目を集めるようになってきたものと考えられる。

現在の日本における「ネットワーキング」という言葉の使用法を大別すると、「企業や統治機構（政府・行政）のネットワーキング」と「市民活動のネットワーキング」とに分けられる。

前者は、生産や管理効率化のためにネットワーク（主に情報通信ネットワーク）を活用しようとするもので、現在までの成長や支配の構造を維持・強化することを言外の目的にしている。あるいは、産業・統治システムの活性化の道具としての認識に立って、人脈活用によるアイデアづくりや異業種交流による産業の生き残りを画策するためのコンセプトとしての「ネットワーキング」を用いることもある。

一方、後者つまり「市民活動のネットワーキング」は、人間らしさや生命の尊重に基づく共生社会を作ることを目的としている。現代の産業社会の矛盾や「死に至る」メカニズムを直視して、現在ある産業社会のシステムに対する対案を提示し、変容を迫ると同時に、近未来の「ポスト産業社会」の想像の基盤（ファウンデーション）を築いて行くプロセスである。言うなれば「希望のネットワーキング」である。

現在、私たちの拠って立っている「豊かさ」は、裏返せば、地球規模での環境汚染や資源消費などに支えられている。そして、また、地球上には、地球を何十回でも破壊できるような核兵器が存在している現実がある。

このような状況から考えるならば、これは、どちらのネットワーキングが正しいか、正しくないかの問題ではなく、地球の未来・人類の希望をいかに描くかと言う問題である。

「ネットワーキング」は、成熟した現代文明が包含するこうした問題を克服し、普通の人々

が、人間らしく生きられる共存社会を造るための道具なのではないだろうか。

「ネットワーキング」は、人と人が結び合う「もうひとつの形」を示している。また、それはグループとグループを結び合い、さらに、ある社会から新しい社会への橋渡しを行おうとするものである。また一方で、私たち自身の内にある「もうひとりの私」との結び合い・共生をも提起する。

こうしたネットワーキングは、時代の産物であると同時に、人類が始まって以来、脈々と続いてきた社会変遷の底流（アンダーカレント）とでも呼ぶべきものなのかも知れない。たまたま「ネットワーキング」という適切な言葉を得て、人々の意識の上に顕在化したのではなかろうか。その意味では「ネットワーキング」は、無味乾燥な情報の流れではなく民衆の英知の脈動であり、そうした側面を捕捉し得るようなネットワーキング論を私たちは展開していかなければならないと考える。

1-2 2つのネットワーキング

ネットワーキングという言葉は、人々の間に広く浸透する過程で当初の固有の意味を越えて、多様な意味内容を表す「普通名詞」として使われるようになった。基本的には、いずれも「共通の価値観や共通の目的意識を持つ人々が、これまでの思想体系やイデオロギーなどにとらわれず、地域や職業を越えて社会資源を共有するために情報を交換することである」という点では異なるところはないのだが、背景として想定する社会ビジョンを始め、そのめざすところや目的によって言葉の表す意味内容の様相が違ってきている。つまり、現在では「ネットワーキ

ング」という言葉の使われる背景と意図を明らかにしなければ、その真意をはかり難くなっている。

こうした状況を踏まえ、「ネットワーキング」の言葉をめぐって若干の整理をしておく必要がある。

もう一度、わたしたちは、どういうネットワーキングを自分のネットワーキングとして選択するのか、考えてみた方がよさそうだ。

前述のように、現在の日本では、「企業や政治機構（政府・行政）のネットワーキング」と「市民活動のネットワーキング」に大きく分けて捉えることができる。

同じ「ネットワーキング」という言葉も、前提として描く社会ビジョンや目的に応じて様相を異にし、その態様や挙動、想定される主体のイメージも大きく異なってくる。

ここでは、2つのネットワーキングの潮流を概観しておこう。

(1) 「産業社会の」系譜～情報通信産業

社会のネットワーキング～

「企業や統治機構（政府・行政）のネットワーキング」が想定する社会のビジョンは「産業社会」である。「産業社会」における「価値」は生産拡大と成長である。その要素をキーワード的に並べてみると、主体（主役）は企業もしくは企業人であり、活動の場は市場であり、いとなみは生産、やりとりは取引（交換）、行動は競争（収奪）、目的は富の追求と利潤・力の獲得、そして、社会の方向は成長と拡大と成長を続ける永遠の繁栄……という図式になる。

「産業社会」は、それを支える社会的技術を指標として、第1次は機械産業社会、次に石油化学産業社会、そして現代から近未来の情報通信産業社会の3つの段階に区分される。

「産業社会」のネットワーキングにおいても、さまざまなレベルのネットワーキングが語られる。まず、国家（行政体）のネットワーキングは支配体制の維持と強化をめざす。企業のネットワーキングは、巨大化（世界化）した生産とサービスの供給の効率化による利潤追求のための管理を目的とする。企業人（ビジネスマン）のネットワーキングは、企業利益増大のために、個々のビジネスマンの成功のためのノウハウとしてのネットワーキングを強調する。

特に「ネットワーキング」が重要視されるのは、第3段階の「情報通信産業社会」においてである。情報通信産業社会における、力の源泉は「情報」である。情報力を持ったものが勝者となる。企業がその主体として存続する可能性は充分にあるが、情報の集積・創造・伝達（交換）は、個人のレベルでも可能である。

特に情報創造の場面では企業との遜色はない。これに、社会のインフラストラクチャーとしての情報ネットワークによる集積・伝達（交換）手段がサポートされることによって、情報力を持った「個人（起業的人間）」が力を手に入れ、そうした「個人（起業的人間）」が提携してネットワークを作り、「知的生産体制」のひとつとして企業とともに社会の主体を二分する可能性がある。

すなわち、情報通信産業社会のネットワーキングは、「個人の（起業的人間）」のネットワーキングであり、情報力の集積と集権的分散型による管理と、個人の創造力と情報力を基礎とした「知的生産体制」の確立をめざす。

産業社会の系譜にある「情報通信産業のネットワーク」は、こうした「知的生産体制」としての“単位”にはかならない。そのネットワークは、他のネットワークや企業との情報力の競争に勝ち抜き、勝利をおさめることが目的であ

る。

(2) 「市民活動のネットワーキング」～脱産業社会をめざすネットワーキング～

「市民活動のネットワーキング」が想定する社会ビジョンは「脱産業社会」として括ることができる。「脱産業社会」のネットワーキングは、生命を持つ人間、地球に生きる人間としての「個人（生命系の人間）」のネットワーキングであり、そうした「個人（生命系の人間）」がつくるグループのネットワーキングである。そのめざすところは、生命の尊重と地球における共生であり、そうした価値に基づく社会の創造と変革もしくはその準備である。

脱産業社会のネットワーキングでは、情報であれ資本であれ、およそ「力」の獲得競争は想定されない。異質な個性を持つ「個人（生命系の人間）」の「生命」や「生き様」そのものが尊重される。人と人の結びつきは競争関係とはならない。グループを形成しても、人間は目的達成のための部品ではなく、ひとりひとりの特質と個性に応じて活動し、質的にも多様である。したがって序列や主従関係は形成されない。

また、ネットワークの固定化を避けて自由な連携を切り結ぶ柔軟な態勢、常に開かれている開放性を持つ。ネットワーク間の関係も、相互尊重に基づく信頼あるやりとりが基本となり、分野を越えて相互に協議するチャンネル(回路)を持つことになる。異なる分野の市民活動グループが多層に、かつ多次元にネットワーキングすることを通じて、いのちを紡ぎ出し、暮らしを支えあう「もうひとつの社会」が生み出されていく。

このように市民活動のネットワーキングは、人と人、グループとグループが結び合うプロセス(過程)であり、さらには、産業社会から脱

産業社会への橋渡しを行うものである。

しかしながら、市民活動のネットワーキングは、1980年代に始まって間もない。もうひとつの社会を生み出す「シナリオ」もようやく見え始めたところである。

2. ネットワーキングのひろく社会ビジョン(省略)

3. ネットワーキングを展開するうえでの問題点と打開策

ネットワーキングを進める時に、ネットワーカーはさまざまな障害に会う。あなたにも、少なからず思い当たることがあるだろう。

そうした障害をどうやって打開していくのか……。

3-1 はじめに

ネットワーキングは、それを展開する人の考え方やめざすところによって、さまざまに「形」を変える。

時には、多くの心をひとつに結びあい、また、時には、些細なことでもつまづくこともある。

ネットワーキングを展開する上では、様々な問題点が出て来て、それがネットワーキングを妨げる障壁になっている場合が多くみられる。

ここではその問題点を①ネットワーキングとネットワーカー、②ネットワーキングのサポートシステム、③ネットワーキングの手法—の3点に絞り、具体的な問題点とその打開策について考えてみる。

ネットワークーたちが、たどって行く一つの道のりを考えた時、互いに知恵を共有できたら、その道は、もう少し明るく歩みやすくなるかもしれない。

とは言え、所詮ネットワークーの道はその人自身が歩いて、初めて自ずと明らかになる。回り道や落とし穴、壁にぶつかって、それを乗り越えていくことも、ネットワークーキングの過程として大切にしていきたい。

3-2 ネットワーキングとネットワークー

まず、ネットワークーとはいったいどのような資質を持った人間であるか、大まかな整理をしてみると、次のような人物像が浮き上がってくる。

- 自らが学ぼうという姿勢を持っている
- 多様な価値感を受け入れられる
- 個性的
- 自立（自律）している
- 他者に対して共感できる
- 視野の拡大ができる
- ひとつの生活の枠組みに固定的に自分をはめこまない
- ロマンを抱き、ビジョンを描ける
- 感性が豊か
- 責任を自覚し、それを果たせる
- 自己と他者の個性・生命を尊重する

このようなネットワークーが存在し、ネットワークーキングを可能にする集団（組織）では、運営や人間関係、意思決定システム、他集団との関わりにおいて、次のような相反する関係が渾然一体となって存在し、またそれが良好な関係となっている場合が多い。そして、これらの関係は 正反合 の展開をする。

- 日常－非日常
- 固定－流動
- インプット－アウトプット
- 個－集団
- 集中－拡散
- 中心－周辺（際）
- 時間－空間
- 自然－人工
- 自由・自律－規則・会則
- 抽象（～のありかた）－具体（もの）
- 現実－理想
- 異質－同質
- 自立－共生

ネットワークーキングとネットワークーが直面する問題点としては、

- 「自らをネットワークーだと思っていながら、ピラミッドの頂点に立つことを無上の喜びとし、自分を常に中心に置かないと（まわりからもそう見られないと）気が済まない人物を抱える団体の悲劇」
- 「自分（たち）のやっていることはすべて正しいと思込んでいる人（団体）が、自分（たち）のやっていることを他人（団体）は理解してくれないと嘆き悲しむ」
- 「ゆるやかな集団を組もうとするがゆえにまとまりがなくなってしまう」
- 「ピラミッド型社会へ取り組まれてしまいそうになる（お金が付く、社会的に認知される）葛藤」
- 「個性的すぎる」
- 「他人の意見を聴き入れない。自分を開いていない」
- 「一網打尽、束ねることをネットワークーキングであると思込んでいる」

などが挙げられる。

これらの打開策としては、常にネットワークー

ングとネットワーカーのあり方を意識した行動、思考、人間関係を実践していくことに尽きるのではないだろうか。

3-3 ネットワーキングのサポートシステム

ネットワーキングのサポートシステムには①場、②サポートする人間、③サポートする機関、④サポートする法制度、⑤情報の発信・受信・交信などが考えられる。

- ①「場」とは、拠点・たまり場で、これは固定したものの場合と偶発的に存在する場合がある。
- ②「サポートする人間」はいわゆる共鳴者・支援者で、活動を客観化・理論化・評価し、場合によっては他との整合性を図る人である。
- ③「サポートする機関」とは、組織として存在しさまざまな形で支援、協力してくれるもので、ボランティアセンター、NGO推進センターなどのほか、財政面の援助機関として助成財団や基金、公益信託などが考えられる。
- ④「サポートする法制度」とは、民間非営利グループの活動を支援する法的制度であり、税金の減免制度やグループメンバーの保険などの制度などが考えられる。
- ⑤「情報の発信、受信、交信」についてはミニコミ、マスコミという従来からのもののほか、パソコン通信やミニFM局といった新しいものも出現してきている。

ネットワーキングのサポートシステムの問題点としては、次のようなことが具体的に考えられる。

- 「拠点ができない」と努力しないであきら

めている

- いろいろな会合、集い、出会いのチャンス
を逃す
- 評価されるのがとにかく嫌い。自分でも客観的に評価できない
- ボランティアセンターの考えと合わない。
利用のエチケットを守らない
- マスコミがとにかく嫌いだ
- マスコミが自分たちのことを取り上げない
のはおかしいと思っている
- 自分たちのことを人に伝えようとしない
- 情報を積極的に取り入れない
- 臨機応変に対応できない
- 約束を守らない
- 最初から財団などは自分たちを相手にしない
と決め込んでいる
- 財団と企業の区別がつかず財団等からの援助を毛嫌いしている
- 助成金等に関する応募要項をよく読まない
で申請してしまう
- 法制度整備の要求についてグループ間の足
並みがそろわない
- 法制度整備のための政治的回路がない（作
っていない）

これらの打開策としては、自分（たち）に凝り固まることなく、いつも周囲や社会制度との関係を意識しながら、時には相手に合わせたり、あるいは正規のルートを作って要求していくことも必要であると考えていかなければならないのではないか。

3-4 ネットワーキングの手法

ネットワーキングの手法（手段・方法）には、さまざまなものがあるが、まずネットワーキン

グで何をしようとするのかという、目的を明確にすることが必要である。

まず考えられるのは、自分たちが何をやり・何をめざしているのか、一方、他の人や団体が何をやり・何をめざしているのかという情報を収集、分析、結合、伝達、保存、活用することであろう。

その方法のひとつは集会・イベントといった直接的な出会いの場（顔の見える関係）であり、もうひとつは機関紙（誌）・電話・テレビ・パソコンネットワークといった間接的な出会い（顔の見えない関係）である。それぞれに長所、短所がありどちらか一方だけでは十分なネットワークングを行うことは困難である。しかし両方で行われていることは、情報の発信と受信そして加工することであり、自らが積極的に動くことからすべてが始まるのである。

具体的な問題例としては、

- 目的がはっきりしていないため、成果が現れない
- いろいろな会合、集い、出会いのチャンスに積極的に出ないで逃す
- 普段から自分たちの活動を人に伝えようと

しない

- 道具がない
 - 機械が苦手
 - 特定の人に仕事や情報が依存し過ぎ、その人がいないと仕事が停滞する
 - 事務処理（手続き・企画・予算・渉外）がうまくできない
 - グループの運営などのマネジメントに関心がない
- などがある。

これらのついでの打開策は、とにかくやってみる、という一言に尽きる。そのためには自分の日常の活動を振り返り点検し、謙虚な気持ちで他の人やグループの活動に学ぶという姿勢が必要であろう。また、機械の活用、事務処理、グループ運営などについては、時には企業などの事例も参考にしながら、市民活動に適したマネジメント技術を作り出していく努力も必要なのではなかろうか。また、新たなネットワークを育成していく仕組みやお互いの情報やノウハウを交換する仕組みを共同して作っていくことも大切ではないか。

4. ネットワーキング社会へのプランと ネットワークのしごと（省略）

ネットワークキング社会のためのマトリックス

Field Step	価値・理想 ビジョン	システム 仕組み	インター・ セクター	インター・ ヒストリー	ファウンデ ーション
Step 1 たずねあう やりとり	イメージの 自由な交換 を行い、キ ーワードを 整理する	社会システ ム上の障害 など課題を 発見する	異なる領域 (企業等) の行動・価 値との違い を認識する	ネットワー キングの沿 源を歴史の 中に見出す	ネットワー キング社会 についての 社会的アピ ールを行う
Step 2 見晴らす あたためる	ネットワー キングの開 く世界を物 語としてシ ナリオ化	社会システ ムに関する 他国の仕組 みの検討と アイデア	異なる領域 における変 化の徴候と その効果を 検討する	各時代の市 民活動の特 質を比較し て現在の位 相を探る	「ネットワ ーキング社 会物語」の 取りまとめ と合意形成
Step 3 描きあげる くみだてる	ネットワー キング社会 の価値等を リズム型 に体系化	社会システ ムに関する 具体的検討 と既成制度 との関連	異なる領域 における変 化を促す方 策を検討す る	自己の内に ある歴史性 への目覚め の喚起	ネットワー キング社会 のシステム 構築の道筋 と主体形成
Step 4 試してみる 翔ぶ 踏み固める	宗教・思想 とのリンク の可能性	社会システ ム整備のた めの法案・ 制度等の検 討	インター・ セクターの ためのリエ ゾン・橋渡 しの検討	次代のネッ トワーカー を生み出す 仕組みづく りの提案	ネットワー キングシス テムによる 実験的社会 の形成
Step 5 ひらく 産む 扉を閉じる スパイラル	人々の意識 ・無意識へ のはたらき かけの可能 性	法律等の制 定以外の方 策によるシ ステム整備 の提案	他のセクタ ーとの協働 による仕組 みの形成	ネットワー キングの歴 史と未来へ の橋渡しの 提案	ネットワー キング・フ ァウンデー ションの設 立と運営

(出所：前掲29ページ)

1990年2月25日

自治研かながわ月報第22号(1989年12月・1990年2月合併号)

発行所 社団法人 神奈川県地方自治研究センター
 発行人 横山桂次 編集人 上林得郎 定価1部 500円
 〒232 横浜市南区高根町1-3 神奈川県地域労働文化会館4F
 ☎ 045(251)9721(代表) FAX 045(251)3199
 振替口座 労働金庫本店 1365-100982 横浜銀行市庁舎支店 317-709629

会員になるには

1. 誰でも会員になれます。
2. 申込書は自治研センター事務局にあります。会費は個人会員月 1,000円、賛助会員月 500円のどちらかを選び、半年または1年分をそえてお申し込みください。
3. 詳細は自治研センター事務局 ☎ 045 (251)9721へご連絡ください。

会員の特典

1. 自治研センターの「自治研かながわ月報」が隔月送られます。
2. 「月刊自治研」(自治労本部自治研推進委員会発行・A 5判・120~150ページ定価450円)が毎月無料で購読できます。
3. 自治研センターの資料集が活用でき、調査研究会などに参加できます。